

三国時代・統一新羅時代の仏教に対する研究

福士慈稔

1. はじめに
2. 三国時代・統一新羅時代仏教通史
3. 朝鮮三国の仏教の伝播と受容
4. 統一新羅時代と仏教
5. 新羅僧の研究
6. 新羅浄土思想
7. 仏教美術からの研究
8. 日本研究のための研究
9. その他の研究
10. おわりに

1. はじめに

本企画に当たって、筆者が三国時代と統一新羅時代を担当することとなった。どれほどの研究成果があり、それ等をどれほど網羅できるか些か心配ないが、ただ、方向としては仏教系の権威あるとされる論文集だけではなく、史学や美術関係の論文集、及び一般向けの雑誌等に収められている論稿も視野に入れて紹介できれば、と思っている。それは、一時韓国の学者によって、その研究姿勢と目的を非難されていた戦前の日本人の朝鮮半島に関する研究ではあるが、しかし、それ等の研究から半世紀経った今も、史料上の制約からか、それ等を凌駕する研究が現れておらず、今後の研究の方向としては、戦前の研究を土台とし、そして全ての研究分野の成果を

取り入れ、または斬新な視点を取り入れるしか方法がないものとするからである。よって、筆者が未見の論稿もタイトルだけでも知り得るものは紹介していきたいと思っている。

尚、紙幅の関係上、論題のサブタイトルは省略することとする。附設の参考文献目録を参照されたい。

2. 三国時代・統一新羅時代仏教通史

(1) 著述

三国時代の仏教に関する著述は、青柳南冥[1911]『朝鮮宗教史』中の仏教章「概論」及び「三国時代の仏教」を嚆矢とする。時代の流れに呼応すべく、朝鮮半島への布教に際して必須であるとして朝鮮の宗教を概説したもので、朝鮮半島の儒教・基督教の歴史をも論じ、次に、我宗教家布教の現状、我宗教家に警告す、朝鮮布教の後援、と続き最後に(附録)新羅高僧の碑文として知異山雙谿寺眞鑿禪師碑銘を附したものである。統一新羅に対する言及はなく、三国仏教の次に高麗の仏教と続く。典拠がなく、研究書とはいえないものの、先行研究がなかったことと、当時の朝鮮の宗教を網羅したことを鑑みると評価できる内容である。

次の著述は忽滑谷快天[1930]『朝鮮禪教史』である。書名にあるように本書は朝鮮半島の禪教の受容と展開を明らかにすることを主眼とし、第二編禪道蔚興の代、第三編禪教竝立の代、第四編禪教衰頹の代、として李朝末までを網羅するものであるが、第一編教学傳來の代においては朝鮮半島及び中国史料を緻密に整理し、禪教伝来以前の三国・統一新羅の仏教のみならず、仏教伝来以前の朝鮮半島の固有信仰、三韓時代から三国の建国までにも言及し、第二編は禪教中心ではあるが統一新羅末までで、第一編・第二編を合して「三国・統一新羅仏教史の研究」として呼び得るほどの内容と体裁をもっている書である。

それから遅れること40年あまり佼成出版のアジア仏教史全20巻中に、独立したものではなく中国編に組み込まれ[1976]「中国編IV東アジア諸地域

の仏教」という形ではあるが朝鮮仏教史がみられ、その中の第一章・第二章が三国・統一新羅時代に該当する。

そして権相老の中央仏教専門学校(現東国大学校)での講義案『朝鮮仏教史藁』を訳注し第一部とし、第二部に朝鮮仏教美術の写真と解説、第三部に朝鮮仏教史年表を附した中吉功[1973]『海東の仏教』の訳注編第一部第一遍三国時代が三国時代と統一新羅時代の仏教史を簡潔に整理している。

その後の著述としては、前半部が「韓国の名寺・名刹を巡る」、後半部が「朝鮮仏教の歴史と展開」として実態調査と文献研究とによって朝鮮仏教を紹介する鎌田茂雄[1980]『朝鮮仏教の寺と歴史』がある。

同様の形式で前編「韓国仏教史」、後編「韓国仏蹟巡錫記」として朝鮮仏教を紹介する愛宕顕昌[1982]『韓国仏教史』に三国・統一新羅時代の仏教が整理されている。

また玉城康四郎編[1983]『仏教史Ⅱ』(第三部朝鮮)、そして鎌田茂雄[1987]『朝鮮仏教史』の第一章「古代三国の仏教」、第二章「統一新羅の仏教」が三国・統一新羅時代の仏教の概説として発表されている。

(2) 論文

三国・統一新羅時代の仏教の通史的論稿は、朝鮮仏教の年代区分として三国時代を準備期、統一新羅時代を興隆期、高麗時代を爛熟期、李朝時代を衰退期とし、朝鮮仏教史全体の特色を考察し、特に三国時代の高句麗仏教の特色として雑信性、百濟仏教を典籍性、新羅仏教を軍事性が顕著であり、統一新羅仏教は教学的で、また三国のそれぞれの特徴を継承しているとする江田俊雄の一連の朝鮮仏教の通史的論文がある。それは[1943]「朝鮮仏教史の特色」をはじめとし、[1944]「朝鮮民族の興亡と朝鮮仏教の隆替」、[1957]「朝鮮仏教要説」、[1958]「朝鮮の仏教」等である。これら論稿の三国・統一新羅時代に該当する部分で三国・統一新羅仏教の概要を知ることができる。これらの中で特に詳細なのが「朝鮮民族の興亡と朝鮮仏教の隆替」で三国各国の民族・文化と仏教との関わりを論じながらも、新羅では僧侶に標準をあわせ新羅僧の求法を整理し、また新羅仏教の特性としての祈祷信仰を道説をもって論じているのが、当時としては注目に値す

る。

李箕永[1972]「新羅仏教の性格とその現代的意義」は、高句麗・百濟の仏教に対しては基礎的な学問的探求と未熟な宗教生活の段階に留まっていたとし、新羅仏教に関しては九項目に分けて詳細にその性格を論じ、また新羅仏教を草創期・隆盛期・衰退期とに区分したこと、新羅が三国を統一するに至った要因を仏教信仰に求めていること等、後の研究に少なからず影響を与えている論稿である。

次に鎌田茂雄の[1980]「朝鮮三国の仏教」は、朝鮮仏教の史的位相から始まり、仏教の朝鮮伝播、高句麗・百濟の仏教、新羅の仏教、統一新羅における仏教の展開、等々通史的に概観し、同様に[1991]「第一章概説」でも朝鮮仏教史の概説がみられ、三国・統一新羅時代に該当する部分で、その概要を知ることができる。

3. 朝鮮三国の仏教の伝播と受容

朝鮮三国の仏教の伝播と受容に関する論稿を、「三国」、「高句麗」、「百濟」、「新羅」と区分して紹介していくこととする。ただし、「三国」は、新羅に対する比重が高い論稿も多く「新羅」に入れるべきものも多々あるが、僅かでも高句麗・百濟に言及しているものは「三国」に編入させた。また仏教伝播以前の固有信仰への研究が韓国では活発であるため項目として考えていたのであるが、日本では固有信仰のみへの言及論稿は若干あるものの仏教と固有信仰の係わりに関する論稿は、三品彰英[1954]「朝鮮における仏教と民俗信仰」がみられるだけで項目を作ることができなかった。

次に、近年、韓国では百濟の地での仏教遺跡の発見と発掘調査報告書が発表され、百濟仏教に関する関心が高まり多くの論文が発表されている。日本でも百濟の仏教伝播と受容に関しては、田村円澄等の日本仏教研究の一環として論じられたものは多々あるが、それらは後章の「日本仏教研究のための研究」で紹介することとしたい。

1) 三国

仏教の伝播と受容に関しては、通史として区分した著述及び論文でも見られるのであるが、ここでは特に三国の仏教伝播と受容に限定する論稿を紹介する。

朝鮮三国の仏教の伝播と受容に関して早期のものは、三回にわたって『朝鮮』に掲載された都甲玄卿[1932-1933]「仏法の新羅流伝と其の採用説」である。高句麗・百済への仏教伝来の年次に関して、高句麗小獸林王代の伝来は中国史料に記載が見えないことから曇始の来朝が初めて、三国内では百済に最も早く仏教が伝わったものとし、次に新羅に関しては諸種の伝来伝説を整理し、阿道と墨胡子は同一人物で新羅への来朝は22世智證王代とし、また白乳に関する伝説を整理し異次頓の刑死白乳湧出伝説の根拠を仏典に探る。都甲玄卿の論稿は学会に影響を与えるには至らなかったが、その論旨の特異さをもって、一読を勧めたい。

後代に影響を与えた論稿は末松保和[1932]「新羅仏教伝来説」であり、後に題名を改め後半部分を補訂した[1954]「新羅仏教伝来伝説考」が、特にこの問題を論じるときに指標となっている。末松の論稿の特徴は各史料間の記載の相違をみるとき、例えば『三国史記』の場合は『旧三国史記』の存在を想定し、『海東高僧伝』の場合も『現存の海東高僧伝残巻』というように、いたずらに史料批判を行わず史料の伝世問題から生ずる問題をも視野において史料整理を行っているところである。第一章高句麗・百済の仏教伝来では、高句麗仏教は北方と南方と両方に源流を有するのではないかとし、百済への仏教伝来は『日本書紀』の百済僧親觀上表文の解釈から、524年頃・6世紀初期か、または452年頃・5世紀中頃ではないかとする。第二章新羅仏教肇行の紀年では、肇行仏法を『三国史記』新羅本記では法興王15年、『三国遺事』所引の新羅本記では法興王14年となっているのを諸史料を整理することによって、『三国史記』の記載が史記編修の時に誤ったもので肇行仏法を法興王14年(527)とする。また韓国で528年とする論稿も若干みられるが、この説が現在まで日本の学会で支持され肇行仏法を527年とし一年の差を生じさせている。第三章新羅仏教伝来伝説では、『三

国史記』・『三国遺事』・『海東高僧伝』の伝来伝説を整理し、新羅仏教の伝来者は阿道(我道)和尚であり、起原的紀年として大通元年=法興王丁未(527)、新羅仏教の素地をつくったのは高句麗仏教で、その素地の上にそれを肇行にまですすめたものが梁の使僧元表であったとする。次に第四章異次頓伝説の発展で、『三国遺事』の異次頓伝説と栢栗寺石幢記、そして石幢記を木版に起こした二種の法帖を対校し異次頓説話の進展を考察したものである。

次に、新羅の受容に限定した江田俊雄[1935]「新羅に於ける仏教の受容に就いて」があるが、江田の同年発表の[1935]「新羅の仏教受容に関する諸問題」は「新羅に於ける仏教の受容に就いて」を更に詳細に論じたものである。先ず、高句麗と百済の受容にふれて明確な断を下していないものの『三国史記』の記載を認め、次に新羅の仏教受容について、新羅における仏教初伝伝説を整理し諸伝説に重複があるのではないかとしながらも、度々登場する阿道とは普通名詞で、一善郡の郡人毛礼も同一人ではなく氏族の姓とし、訥祗王代(417-57)伝来の可能性を示唆し、また異次頓説話、法興王が仏教を公に採用した理由、法興王代の群臣の排仏論の根拠、新羅最古の仏寺等に言及する。

松林弘之[1968]「朝鮮三国鼎立時代の仏教」は、高句麗と百済の仏教伝播の年次に関しては『三国史記』の記載を承継し、新羅の仏教伝来伝説に関しては末松保和の見解を承継しているものの新羅の仏教公認の年次に関しては『三国史記』の記載に従っている。第一章で高句麗、第二章百済、そして第三章で新羅の仏教受容と三国統一までの僧侶を紹介していて、松林が述べるように統一新羅仏教を論じる前の準備段階の概説的論稿である。

蔡澤洙[1977]「新羅における中国仏教の受容形態」は、新羅への仏教伝来が高句麗・百済からであることから、先ず高句麗・百済の仏教受容を概観し、次に新羅の仏教受容形態を概観したものである。高句麗仏教の当初は「福を求めるための仏教」であり、その後「護国のための仏教」・「道徳律としての仏教」という色合いを濃く示すに至ったとし、またそれは三国時代において百済や新羅にも相通じるものとするが、特に百済仏教には戒律中心の特徴が見られ、新羅仏教には弥勒下生信仰が見られるとする。

また蔡印幻(澤洙)[1977]『新羅仏教戒律思想研究』は戒律思想の側面から三国・統一新羅仏教を考察したものであるが、「第一章三国時代における仏教伝来と戒律」が本項目に該当し、史料・研究成果を網羅している優れた論稿である。

次に年代は下がり石井公成[1991]「仏教の朝鮮的変容」は中国と三国との関わりを重視し、三国での地理天文などの法伎の重視から、また護国仏教的側面等から、仏教の三国伝播と受容変容の過程を整理したもので、伝播行次に関しての言及は少ないものの、受容と変容の過程と思想の流れを理解するに助けとなる論稿である。

(2) 高句麗

次に高句麗に限定したのものとしては新川登亀男[1977]「高句麗の仏教受容」、木村宣彰[1980]「曇始と高句麗仏教」、林泉[1996]「高句麗における仏教受容と平壤」等がある。

新川登亀男[1977]は、高句麗の仏教はただ前秦仏教の移植に限定されない性格のもので、たとえば、魏や晋の仏教も窺える、という言葉に顕われるように、仏教受容関係史料を検討し、諸史料の記載の相違を合理的に解釈しようとする論稿である。全てを合理的に解釈しようとし、また内容が豊富なため論点が明確でなくなっているが、高句麗への仏教伝来の意味を見いだすため前秦の仏教を整理し、前秦の仏教を「兵彊国富」のための仏教と規定し、高句麗の仏教は「宗廟」や「国社」の存在と矛盾することなく受け容れられ、とりわけ南鮮を意識した「兵彊国富」に奉仕しそれを表象するものとして、まず僧そのものを優先したと結論づける。

木村宣彰[1980]は、朝鮮史料の順道の高句麗仏教初伝記事の史実性を捏造譚として否定し、中国史料と崔致遠の「鳳巖寺智証大師寂照塔碑」等の朝鮮史料から、高句麗に仏教を伝えたのは曇始が始まりであるとし、『三国史記』及び『三国遺事』への原典批判の必要性を問う論文であり、林泉[1996]は、『三国遺事』所引「高句麗本記」は現行の『三国史記』のものとは異なる『旧三国史記』のものではないかとし、高句麗における仏教受容の問題を最初期に造営されたとされる肖門・伊弗蘭寺の位置を中心に論

じたもので、『三国史記』・『三国遺事』・『海東高僧伝』と『高麗史』・『東国輿地勝覧』等の史料整理と、平壤以外寺院址が発見されていないこと、そして平壤近郊で発見された安岳三号墳、徳興里古墳(平壤西南、南浦市)等から5世紀初頭の平壤地域での仏教流布を指摘し、両寺は当時の都の集安ではなく平壤に造営されたとする初期の受容形態を考察するに示唆を与える論文である。因みに高句麗に限定した論稿ではないが、安岳三号墳及び徳興里古墳と仏教に関しては深津行徳[1993]「法体の王」が詳細である。

(3) 百濟

百濟仏教史を専論したのは田村円澄[1978]「百濟仏教史序説」(後に「百濟仏教の展開」と題し、田村円澄『日本仏教史』4に所収)である。先ず百濟仏教研究に際しての史料問題等の諸障碍を指摘し、仏教伝来の年代、中国の仏教事情、公州時代の仏教、扶余時代の仏教、百濟仏教の山林的性格、百濟の受容経典、百濟の現存仏像等から百濟仏教全般の歴史を論じたものであるが、特に百濟への仏教伝来年次を論じるのに重きをおいている。高句麗に仏教が伝来して十数年後に百濟に仏教が伝来したとする『三国史記』の記事への疑問と、枕流王二年(385)の創寺度僧の後、聖王十九年(541)に至るまでの一世紀半の間、『三国史記』の「百濟本紀」に仏教関係の記事があらわれない事への疑問から、末松保和の論稿(「新羅仏教伝来伝説考」)を紹介しつつ『日本書紀』の百濟僧觀勒上表文の再検討を行い、当時の中国の仏教事情、中国との国交、そして史料及び発掘調査報告書からの百濟の仏教事情を加え、百濟仏教伝来を523年に薨じている武寧王及びその時代とする。注目すべきは百濟仏教の特徴の一つとして「山林仏教」という用語を用いていることである。

次の洪潤植 [1983]「中国南北朝と百濟仏教」は龍谷大学での講演の筆録であり研究論文とは言い難いものの、それまでの韓国での研究を押さえた概説と歴史学的立場からの百濟史研究の方法論が窺える論稿である。洪潤植は韓国仏教を研究するに際し、同時に於ける中国の南北朝と韓国の三国、及び日本との国際関係やそれに伴う文化的要素が如何なるものであったか

を見極めることが必要であるとし、百済仏教を究明するために、百済が仏教を受け入れるための社会的・文化的基盤と当時の百済の国際関係と仏教受容・流伝の性格を理解し、百済仏教の内容と性格がどのようなものであったかを知らなければならないと、それら個々に対して論じたものである。概略は百済と北朝との関係には言及せずに南朝との関係を強調し、百済は中国南朝文化(仏教)を受け入れながら、国内の素朴な支配的イデオロギーをより多様に、または洗練されたる貴族的なものに発展させたとし、百済仏教が戒律主義的で百済では弥勒信仰が盛んであったとする。

最後に、仏像様式の研究から、止利様式が百済を通して日本に影響を与えたことを論じるため百済史を考察する吉村怜[1989]「百済仏教伝来考」は、末松・田村の論稿と史料の再検討により、百済の仏教伝来は毘有王(427-455)とし、次に南北朝時代における百済の対中国外交、そして百済と高句麗の関係等を整理することによって、松原三郎や毛利久の北朝文化が百済に影響をあたえたという説を挙げながら、百済仏教に影響を与えた中国仏教といえば、南朝仏教か、南朝を経由してきた仏教に限られていたとする。これら仏像様式を中心とした論稿は後項にて紹介することとする。

(4) 新羅

新羅に限定した論稿は、先ずは村上四男[1976]「新羅真興王と其の時代」で、新羅仏教受容期を考察する際には法興王及び真興王代の国家体制への認識が必要であるとして、その真興王代を対象としたものである。特に仏教と関係があるのは真興王即位時の年齢であり、それによって即位当初の仏教関係政策の主体が誰であったかが窺われるのである。本論稿は『三国史記』記載の7歳即位と『三国遺事』記載の15歳の中で、特に『三国遺事』王暦真興王条の記事に疑問を呈し、また真興王巡狩境域碑中の昌寧碑の記事をもって『三国史記』の7歳即位説が採られるべきである、とする。また王母と王妃、王母の摂政時代等への言及は、当時の王族の出家の問題にも示唆を与えるものである。

李成市[1982]「朝鮮における外来思想とその受容者層」は、韓国での思想史研究の成果を前近代全般にわたって整理し紹介したものであり、第二

章新羅における初期仏教の受容が本項目に該当し、韓国の李基白の三本の論文の紹介がみられ、李基白「三国時代仏教伝来とその社会的性格」は韓国における歴史学界の朝鮮思想史研究に対する研究方向を示した論稿で、新羅初期仏教の性格については、個人ないし国家のための現世利益的な性格を強く持っていたこと、また護法と護国、仏法と王法を一致させていた点が挙げられ、仏教受容が果たした役割については、王権の伸張に伴う公的権力としての王権の合理化、氏族的血縁的対立を乗り越える精神的統合策、征服戦争における護国信仰としての役割等が挙げられているとし、「三国時代仏教受容とその社会的意義」は旧稿に若干の補注を加えているだけであるが、「新羅初期仏教と貴族勢力」は初期仏教の受容過程における支配勢力であった真骨貴族層の位置と役割、そしてその思想について考察し、また仏教受容時に関しては『三国遺事』に法興王14年に興輪寺の創建工事が一旦着手されたにもかかわらず中断され、8年後(535)に再び建て始められたことに注目し、法興王22年(535)が仏教公認の年とし、王族に仏教的名前が多いことから王室内で仏教信仰が篤かったこと等が記されていることを紹介している。李成市のこの論稿は、日本国内で韓国の論文に目を通さなかつた研究者に韓国の研究成果に目を通す必要性を知らしめた意義のある論稿といえる。

そして拙稿であるが[1990]「新羅仏教伝来考」は、先行の論文を基に新羅の仏教伝來說話を整理したもので、伝来に関する諸史料に現れる中国王朝名が年代確定に混乱を呈しているとし、新羅への仏教伝来は人質などを出した高句麗との従属関係、及び百済との同盟関係から徐々に官吏や民間等に伝わったもので、確定年代を設定できるものではなく遅くとも毘有王代(479-500)までのこと、としたものであり、[1993]「新羅の仏教公認と受容形態に関する一考察」は、法興王・真興王を中心とする王族の出家とそれに伴う権力構造に関して、諸史料と1989年に韓国で発見された『花郎世紀』を併用し論じたもので、同じく[1993]「新羅に於ける仏教受容の諸問題」は前論文に金石文史料をも併せ、初期の仏教受容形態を考察する際に王族の女性の存在を考慮に入れる必要性と、王族の出家の全てが実権を喪失、または譲渡した後の出家という共通点がみられること等、6世紀の新羅

王族の出家と権力との関係を指摘したものである。

4. 統一新羅時代と仏教

以下に統一新羅時代に言及する論稿を紹介する。内容的に三国時代の新羅にも言及するものが多いが、論稿多数のため整理に当たって便宜上、統一新羅以前でも7世紀以降への言及論稿は本章に区分した。また新羅の時代区分を新羅史の学者達は末松保和[1954]「新羅三代考」に従い、中古(514～654)、中代(654～780)、下代(780～935)という時代区分を用いる論稿が多い。しかし、新羅の国家的発展という側面から論じる場合は妥当であるが、思想史も含め仏教の場合は国家との係わりを強調しなくともよいものもみられるため、敢えて中古、中代という時代区分を用いないこととする。

(1) 新羅と護国仏教

統一新羅仏教の特徴の一つとして「護国思想」を挙げることは現在では常識となっているが、最初期にこの用語を用いたのは江田俊雄[1935]「朝鮮仏教と護国思想」である。「半島統一の大業を完成し、国民は新興の意気に燃えていたとはいえ、東には日本、北には唐が控えていたので、彼等は此の難局を如何に切り抜けるかに不安と緊張を感じていた時代である。従って此の空気は当時の仏教界にも反映し、社会の各方面において、指導的地位に立っていた新羅の僧達の間にも仏教の護国思想が種々の形式を取って最も顕著に載発されて壯観を呈した」として、円光の世俗の五戒にみられる護国思想、慈蔵發願の皇龍寺九層塔の国祚加護説、及び元暁・義湘・道説個々の護国思想を紹介している。

金雲学[1971]「新羅仏教の特殊性」は江田俊雄前掲論稿を見ていないようであるが、しかし円光の世俗の五戒、皇龍寺九層塔、義湘の事跡等に加え、燃燈法会・八閔法会等の国家的儀式から新羅仏教の護国性を論じるものである。

次に朝鮮仏教の歴史と思想的特質を論じる鎌田茂雄[1982]「朝鮮仏教の

特質」では、第二章朝鮮仏教における護国仏教の伝統、として新羅時代は皇龍寺九層塔と感恩寺、円光と世俗の五戒、華嚴十刹の創建—義湘、以上の項目で論じ、それが新羅時代だけの特徴ではなく李朝まで続くとしている。また、事項で紹介するが7世紀中葉から護国的な性格が強調されるようになったとする李成市[1983]「新羅中代の国家と仏教」がある。

尚、護国法会に関しては浜田耕策[1982]「新羅の神官と百座講座と宗廟」は、神官の祭祀記事と仏教儀礼記事を検討し、百座講会は『仁王護国般若波羅蜜多經』を誦誦し外敵の侵攻と内乱を防除し国家の安寧を祈願する重要視された仏教儀礼であるが、その後、祭天の儀であり即位儀礼と密接な結びつきをもった神官の祭祀と結びつき、百座法会を聴講することが即位儀礼の一環に組み入れられ、在位の全期間にわたる国家の安寧を祈願する法会へと発展したとする。

最後に蛇足ではあるが、三国の即位儀礼及び祭祀儀礼をみるときには井上秀雄[1978]『古代朝鮮史序説』、即位儀礼と仏教の関係をみるときには吉岡完祐[1983]「中国郊祀の周辺国家への伝播」、そして三国時代の仏教儀礼と統一新羅の仏教儀礼の構造内容をみるときは洪潤植[1976]『韓国仏教儀礼の研究』中の「第二編韓国仏教儀礼の変遷」が参考となる。

(2) 新羅国家と仏教

国家と仏教の関係、または国家が如何に仏教統制を行ったかに関して論じる場合、仏教統制機関に関して整理していくのが一つの方法である。新羅の仏教統制機関に関しての最初の論文は井上光貞[1965]「日本における仏教統制機関の確立過程」である。「一中国古代の仏教統制」の次に「新羅の仏教統制」として、新羅の仏教統制機関は真興王12年(551)頃、北齊の自治的中央統制機関たる大統・都維那などの制を学び、そのまま墨守するとともに、他方では北朝や隋唐に学んだ俗的統制機関をもったいわば二元的な統制形態をとっていたとする論稿である。それに対し中国におけるものと全く同一でなく新羅独自の形態と機能を持っていたと反駁したのが中井真孝[1971]「新羅における仏教統制機関について」であり、北齊の制に学んだということに対しては、551年頃の新羅の僧侶は、国家権力の支配録

属下におかれていたというよりも、国家権力・王権と密接な関係を有していたとし、官制の出発点において中国北朝の僧官機構を、実体性をもつ仏教統制の機関として模倣したのではなく、それに付随する属性の栄典的側面を模倣したとし、しかし、形式的にすぎなかった僧官も新羅の国力が充実し朝鮮統一戦争を展開する段階の7世紀になると、僧侶乃至仏教イデオロギーそのものが国家権力と深い関わりを有するようになり、ここで国家権力が仏教を利用する、あるいは律令的支配体制の完遂のために仏教を国家権力の隷属下におくという展開となったとする。そして僧・俗の二元的形態であったということに対しては、貴族集団によって王権と仏寺・僧侶の結合を牽制するために設けられた官司から出発した大道署と、王権の私的機関であり王権の仏教政策を遂行する下級事務機関として出発した政法典の二つが確認されるが、それは当初からではなく少なくとも律令的官司の整う650年以降であり、それ以前において、あえて二元的という用語を用いるのなら王権的と貴族制的との並列であったとし、発生における差異を強調し、北齊の様式をストレートに移入し、かつ墨守して存続させているのではないとする。

仏教統制機関の中での寺院管理の問題を取り上げ国家及び王室と仏教の関係を窺おうと試みたのが浜田耕策[1982]「新羅の寺院成典と皇龍寺の歴史」である。『三国史記』職官志の四天王寺、奉聖寺、感恩寺、奉徳寺、奉恩寺、靈廟寺、永興寺の7寺院と永昌宮の成典に対する記載、そして聖徳大王神鐘銘と皇龍寺九層木塔刹柱本記等の史料を整理し、成典の組織をもつ寺院は先王を追善する寺院や護国寺院であって、成典の長官に王の近親者が任じられるなど、国家と王室に密接な関係を有していたとし、次に皇龍寺が成典を備えた寺院の中で四天王寺を上まわる護国寺院の第一の格であったとし、諸史料と皇龍寺九層木塔刹柱本記文献を通して皇龍寺の歴史とともに国家との関係を論じた論稿である。尚、別項で紹介するが皇龍寺九層木塔刹柱本記に関しては黄寿永[1974]「新羅皇龍寺九層木塔の刹柱本記」が詳細である

以上の論稿に対し、仏教統制機関に関しては中井を支持し、仏教統制機関を通じて新羅の国家と仏教のかかわり方を検討するならば、7世紀中頃に

重要な畫期が認められるとし、更に仏教関係官司である成典と皇龍寺について言及した李成市[1983]「新羅中代の国家と仏教」は、成典に関する諸史料を検討することによって、寺院成典を論ずる際に国家と王室を無限定に混用すべきでないとし、成典が組織された寺院は、国家財政によって管理、運営される国家の寺院であり、政策の上からも財政の上からも王室とは原則的に分離されていて、寺院成典は国家の寺院の建立と営繕を目的とする官司であるとし、内廷の王室独自の寺院関係官司の存在を指摘する。そして皇龍寺に関しては、皇龍寺の護国寺院としての役割は善徳王代の所産であって、それ以前の皇龍寺は護国寺院としての国家的性格よりは、むしろ王室との関係が強く、初めから護国寺院として建立されたというよりは、王室の私的な性格の強い寺院として創められた可能性が高い、として浜田と異なる見解を示している。李成市の本論文は仏教統制機関及び仏教関係官司の考察を通して新羅仏教の国家的・護国的性格の歴史の変容の過程を明らかにしようとする論稿であり前項への区分が妥当とも考えられるが、李成市の引用論文の関係から本項に区分した。

次に武田幸男[1986]「創寺縁起からみた新羅人の国際観」は、先行論文によって新羅仏教の国家的・護国的性格を踏まえ、対外関係を主題とした創建縁起をもつ寺塔、皇龍寺九層塔、四天王寺、感恩寺、望徳寺の創建縁起と当時の国際関係から新羅人の国際認識・国際感覚を論じたもので、新羅人の国際認識を知ると同時に、当時の国家と仏教の関係が窺われる論稿であり、李弘植[1975]「羅末の戦乱と緇軍」は、海印寺吉祥塔誌等の四枚の誌石から海印寺の僧兵の存在を指摘し、『三国史記』及び「海印寺古籍」等の史料から海印寺と王室の関係と海印寺の経済力を述べ、高麗時代の僧軍の萌芽が新羅下代にあることを論じた論稿である。

(3) 新羅花郎と仏教

新羅仏教を研究するに際して一つの研究テーマとなっているものに花郎集団及び花郎集団と仏教思想の融合に関する問題がある。受容当初から統一前後までの仏教関係史料が少ないが、花郎集団に関しては若干確認できるため、新羅仏教の受容形態へのアプローチとして歴史学のみならず仏

教学からの論稿も幾つかみられる。

1928年の今村頼から池内弘、三品彰英、鮎貝房之進とつづく歴史学からの花郎研究は、『三国史記』に「実乃包含三教接化群生」と花郎の習俗が道・儒二教とともに仏教と習合していたことがみられるため、若干の言及がみられるものの、主に花郎の組織と機能に関する研究が中心となっている。ただ三品彰英の花郎に関する幾つかの論文の中で、それまでの研究を集大成した三品彰英[1943]「朝鮮古代研究第一部—新羅花郎の研究」中の「第四章花郎習俗の推移とその末流」に花郎と弥勒信仰との習合、及び僧侶との関係等に関しての言及がみられ、仏教と花郎に関して論じる際に必ず目を通すべき論文となっている。尚、三品彰英までの研究史に関しては拙稿[1993]「花郎研究序説」を参照されたい。

さて、金瓚模[1972]「花郎思想研究」は、花郎の制定に関して先行の論稿と史料を整理し、新羅に仏国世界を建設しようとした真興王代に現れ、その国家的組織と体系は王の末年の37年(576)に立てて実施したのではないかとし、次に花郎と僧侶、及び弥勒関係記事を整理し、僧侶は花郎を弥勒仏のような理想位に置いてこれを補佐する役として常に行動を共にしたのではないかとする。そして、花郎の思想的淵源は韓民族の固有なる伝統であり、それが仏教的信仰によって現れたものであるとする。韓民族の思想的淵源に関する言及は見られないが、しかし、仏教に関しては円光が説いた世俗の五戒「君に仕えるに忠をもってし(事君以忠)、親に仕えるに孝をもってし(事親以孝)、友と交わるに信をもってし(交友以信)、戦いに臨んで退くことなく(臨戦無退)、殺生するに選ぶあり(殺生有扱)」が全て仏教思想から説明できると論じ、また同[1981]「花郎道の思想」では、前論稿を整理し、前稿で論じなかった「花郎の思想的淵源は韓民族の固有なる伝統」に関して「花郎の風流思想」として韓国固有の風流思想と仏教思想の関係について難解ながら論じている。

そして拙稿[1989]「円光の世俗の五戒と花郎集団」は花郎集団と仏教思想の結合に関する『三国遺事』弥勒仙化未尸郎真慈条を疑問として、仏教思想との結合を600年に隋から掃国した円光の説いた「世俗の五戒」に注目して論じたもので、鎌田茂雄の世俗の五戒に『提謂波利経』・『願氏家訓』

帰心編等の影響が窺われるという見解(鎌田茂雄[1988]『新羅仏教史序説』)を受け、円光が求法以前は儒教に通じていたこともあり五戒中の忠・孝・信には五戒五常一致の影響が考えられるが、臨戦無退と殺生有扱は円光の涅槃経研究から考えられるとし、花郎集団と仏教思想との結びつきを「世俗の五戒」からとし、またそれ以前の花郎集団と弥勒信仰との結びつきをも疑問としてみたものである。

世俗の五戒を専論したのは中島志郎[1990]「新羅円光世俗の五戒の思想的背景」と、それを簡潔に纏めた同[1991]「円光世俗の五戒と孝思想」である。中島は世俗の五戒は仏教の五戒ではなく、『提謂波利経』の五戒五常一致の影響ではなく『大載礼記』曾子大孝編の孝思想の影響であるとし、「殺生有扱」に対する説明は説得力に欠けるものの、他の四戒が『大載礼記』曾子大孝編と酷似していることを示し、周隋の思想状況と円光の伝記をへの考察から、円光の世俗の五戒は曾子の所説を典拠に「孝名為戒」に独自の解釈を加え、いわば孝の実践を世俗五戒と呼ぶという儒仏一致思想を主張したものであると結論づけている。

尚、花郎研究の転機としては散逸していたとされた金大問の『花郎世紀』が1989年に釜山で発見され、その『花郎世紀』に、新羅仏教公認の異次頓の出自に関する記載、当時の王族の出家に関する記載、智明・慈蔵の記載及び円光の出自と事績を窺わせる記載、花郎集団と仏教の融合時に関する記載等がみられるため『花郎世紀』を用いて、花郎集団と仏教思想の融合時を594年から609年の間でないかとしてみたのが拙稿[1992]「花郎世紀にみられる新羅仏教事情」である。

(4) 新羅仏教研究と史料

① 三国遺事

新羅仏教を研究するに際しての基本史料は周知の如く『三国史記』と『三国遺事』であり、両史料を中心とする論稿が多々みられるが、両史料を使う前に見ておきたい論文は『三国史記』が引く経籍関係記事を整理した末松保和[1931]「高麗文献小録(一)」、『三国遺事』を整理した[1932]「高麗文献小録(二)」、『三国史記』と『旧三国史』の関係に言及した[1966]「旧

三国史と三国史記』である(上記三論文は末松保和朝鮮史著作集6『朝鮮史と史料』吉川弘文館、1997年に収録されている)。

さて、新羅仏教研究の場合は『三国遺事』を中心に論じる論稿が多く、『三国遺事』の記載のみから仏教の伝来、浄土、観音、弥勒等の信仰、密教、将来品、僧、花郎・国仙とその郎徒、神と仏、山林修行等にわたって論じた田村円澄[1987]「『三国遺事』と仏教」、『三国遺事』を主とし『三国史記』を従とし、それに発掘調査の成果を加えて皇竜寺の塔及び像を論じる秦弘燮[1987]「三国遺事にみる塔像」、『三国遺事』を中心に、それに他史料の皇竜寺に関する記録と発掘調査を加えて、皇竜寺の歴史と伽藍配置の推移と『三国遺事』の史料的価値を論じる金東賢[1987]「三国遺事と皇竜寺址」等、『三国遺事』に史料的価値を認めて論じるもの、または認めようとするは多い。しかし、金相鉉[1987]「三国遺事の書誌学的考察」、そして『三国遺事』によって新羅仏教教学と宗派の問題を整理しつつ『三国遺事』の作者である一然の新羅仏教観と共に『三国遺事』の史料的価値を論じる崔柄憲[1987]「三国遺事に見える韓国古代仏教史の認識」、『三国遺事』の仏教説話から一然の仏教観と『三国遺事』の撰述意図を窺おうとする張愛順(戒環)[1996]「普覚国尊一然の仏教観」等の視点が必要であろう。

尚、『三国史記』の仏教関係記事の価値についての研究は見られないが、『三国遺事』を主とし『三国史記』を従とする『三国遺事』重視の従来の研究に疑問を感じ、『三国史記』を主として仏教と国家の関係を論じてみたのが拙稿[1997]「新羅王権と華嚴思想」である。

②その他の史料

史料紹介、または史料の意義・価値に関する論稿で早いものは、新羅誓幢和尚塔碑に関する一連の論稿である。その他に金剛三昧経、二障義、遊心安楽道等に対する論稿であるが、それらの紹介は次章の「元暁」項で紹介することとする。

新羅仏教の史料として朝鮮総督府の『朝鮮寺刹史料』及び『朝鮮金石総覧』が有益であるが原文のみである。楽浪郡及び三国時代から高麗時代後

期までの主要な金石文に解釈を施したものとしては葛城末治[1935]『朝鮮金石攷』が初見であり、また研究するに際して現存史料が少ない新羅仏教研究にとって、必ず目を通さなければならない著述である。

慶州の甘山寺跡の阿弥陀如来像と弥勒菩薩像の光背の銘文に関する紹介は『朝鮮金石総覧』で紹介され、その後、論稿としては鮎貝房之進[1934]『雑攷』、葛城末治[1935]「甘山寺弥勒菩薩造像記」・「甘山寺弥陀如来造像記」、末松保和[1932]「甘山寺弥勒尊像及び阿弥陀仏の火光後記」、そして銘文に対する先行論文を紹介し、その中で特に散骨の記載に注目して新羅時代の火葬を論じる斉藤忠[1981]「新羅の葬制から見た甘山寺跡石造阿弥陀如来像・弥勒菩薩像銘文の一解釈」。尚、末松保和[1934]「新羅昌林寺無垢淨塔願記について」(『青丘学叢』15)で紹介する願記は葛城末治の『朝鮮金石攷』にみられない史料であり、参照されたい。

上院寺鐘と新羅聖徳王神鐘の鐘銘に関しては既に葛城によって報告されている(前掲『朝鮮金石攷』所収)。その他に李弘植[1955]「貞元廿年在銘新羅梵鐘」は、1948年に発見された梵鐘の、発見の経緯と梵鐘の様式、そして鐘銘に釈文を施したもので、804年時の新出の僧名が知られる論文である。

黄寿永[1973]「新羅聖住寺即百済烏合寺とその碑石について」は、崇巖山聖住寺事蹟と発掘出土の金石文から新羅聖住寺の全身が百済烏合寺であるとする論文である。尚、聖住寺の詳細な発掘調査報告書が韓国・忠南大学校博物館から1998年12月に出されており参照されたい。

最近の論文では皇竜寺九層塔の刹柱本記がよく引かれているが、これは史料の紹介と解釈を施した先述の黄寿永[1974]「新羅黄竜寺九層塔の刹柱本記」の功績によるものである。行数74、字数約900の新出の史料は黄竜寺だけではなく新羅仏教研究にも貴重な資料となっていることは、刹柱本記を引く論稿をみれば知られることである。

1978年に韓国の国宝169号となった新羅景德王代の白紙墨書書写経『大方広華嚴経』であるが、史料として重要なのは巻五十の末尾に付されている跋文である。韓国では多くの論稿があるが、日本語での発表は黄寿永[1979]「新羅白紙墨書華嚴経について」による紹介が初見であり、その成

果によってその後、独自に跋文に解釈を施し、その跋文の内容から新羅の多階層構造の骨品制の成立が八世紀中葉を遡る時期であり、またその対象は一部の限られた特権集団であったとする木村誠[1986]「統一新羅の骨品制」がある。

『花郎世紀』に関しては、発見後、学習院大学東洋文化研究所で、学習院大学の故原島春雄、現立教大学の深津行徳、遠山美都男等と研究会を行っていたが、出版を考えていたときに韓国で新たに『花郎世紀』の母本が存在が発表され出版ができなくなった。実際には、今でも二つの『花郎世紀』共に真作・偽作の決め手がない状態である。しかし、仏教関係の記載もみられることから、どうにか解決しなければいけない問題であることも事実である。初期発見の『花郎世紀』の中から仏教関係の記載に注目して発表してみたのが拙稿[1991]「新羅仏教研究と花郎世紀」、先に紹介の[1992]「花郎世紀にみられる新羅仏教事情」、そして[1994]「花郎世紀における諸問題」の一連の論文である。

5. 新羅僧の研究

本章では新羅僧に関する論稿を、その僧の思想に関する研究も含め、紹介することとする。時代順に例えば、円光、慈蔵のように整理する方法もあろうが、他に比べ元暁に関する論稿数が抜きん出ているため、便宜上、元暁を一項目として纏め、他を「その他」として紹介することとしたい。

(1) 元暁

新羅仏教史、韓国仏教史、思想史、教学史等に関する、どのような書籍及び論文をみても、元暁に関して言及していないものを探すことは困難である。また日本仏教史の研究者の中で元暁の名を知らない研究者はいないはずであり、実際に特に日本仏教形成初期に日本に多くの影響を与えたのが元暁である。その元暁に関する研究を大別すると、まずは元暁の伝記に関する研究、元暁の浄土教思想に関する研究、元暁の華嚴思想に関する研

究、元暁の浄土及び華嚴以外の諸思想とに分けることができる。しかし、この中で本項では、元暁の華嚴思想に関する研究と、元暁の浄土及び華嚴以外の諸思想の中で、大乘起信論と唯識関係に関する研究論稿は、他の分担者が紹介しているため言及しないこととする。

① 元暁の伝記に関する研究

まず、元暁の伝記に関する研究は、元暁が入唐したということを前提に、『諸嗣宗脈記』に至相大師の弟子として、賢首、元暁、義、慧裕の名が挙げられていることに疑問を呈し、義湘の伝と元暁の伝とを混合し、元暁までも至相大師の弟子であり華嚴宗の人としたのではないかとしながらも、あくまでも元暁が入唐し玄奘の門で学んだのではないかとする脇谷攝謙[1908]「新羅の元暁法師は果たして至相大師の弟子なりしや」と、元暁の入唐には言及せずに、特に元暁の肉食妻帯の僧であったということに注目し『高麗史』等の史料により元暁の偉大性を述べた見山望洋[1911]「新羅の名僧暁・湘二師」が先駆的論稿である。

次に1914年に慶州で元暁に関する石碑(誓幢和尚塔碑)が発見されたことにより発表された論稿が小田幹治郎[1920]「新羅名僧元暁の碑」、岡井慎吾[1920]「新羅名僧元暁の碑を読んで」、葛城末治[1931]「新羅誓幢和尚塔碑に就いて」の三稿である。岡井は碑文中に元暁の孫薛仲業とあるのに注目しただけのものであるが、小田は碑文の掲載と、釈文、訳文を行い、そして碑文によって誓幢和尚が元暁であること、元暁の子供の薛聰、孫の薛仲業等のことが知られることを述べており、葛城は碑文と『三国遺事』・『三国史記』の記載とを対照し、特に碑文によって知られること等、碑文の持つ意義及び価値に関しての論稿である。

少し時代が下がり、八百谷孝保[1952]「新羅僧元暁伝攷」は、元暁に関する金石文を含めた朝鮮史料を整理することによって『宋高僧伝』の元暁伝を説話的であり、『三国遺事』が史実に忠実であるとし、最後に元暁著作目録を附している論稿である。

この方面でまとまった論稿は本井信雄[1961]「新羅元暁の伝記について」である。まず誓幢和尚塔碑に関して朝鮮総督府[1920]『朝鮮金石総覧』と

葛城末治[1935]『朝鮮金石攷』の判読に相違があると校異を行い、元暁伝の論述にあたって誓幢和尚塔碑を依用した論稿の紹介、元暁の伝記を研究するに必要な朝鮮史料、中国史料、そして日本史料を整理紹介し、最後に元暁の年譜を附しているもので、元暁伝を研究するに際して実に有益な論稿である。

さて、その他、筆者の管見のため康東均[1980]「元暁伝」のように未だ眼目の機会を得ない論稿が多々あるものと思われるが、最近では先に紹介した鎌田茂雄[1988]『新羅仏教研究序説』の中で元暁の伝を紹介するのを知るのみである。

② 元暁の浄土教思想に関する研究

元暁の浄土教思想に関しては、広く新羅浄土教を論じる八百谷孝保[1937]「新羅社会と浄土教」、江田俊雄[1939]「新羅仏教における浄土教」でも窺われるが、それらは後章で紹介することとする。まずは、元暁の浄土教思想を論じる際に問題としなければならないものの一つとして『遊心安楽道』が元暁撰述であるかどうかであるが、八百谷並びに江田は『遊心安楽道』の元暁撰述を疑わず論じており、更に1942年稿とされる望月信亨「義湘・元暁・義寂等の浄土論並びに十念説」でも、元暁の浄土論を「元暁は智儼の説を承けて四種の浄土を分別し、また迦才等と同じく通報化の説を唱えた」としてその根拠を『遊心安楽道』をもって論じ、また元暁の生因説を「元暁は浄土の生因に正因と助因との別があることを説き、発菩提心を以て正因となし、十念等を助因とした」として十念を論じるに『遊心安楽道』をも用いるのである。

その後、村地哲明[1960]「遊心安楽道元暁作説への疑問」で、『遊心安楽道』中に元暁入滅後に訳出された『不空羂索神変真言経』と『大寶積経』が引用されていること等の指摘に端を発し、元暁の生存年代と『遊心安楽道』の体裁の検討から偽撰とする山田行雄[1965]「遊心安楽道の浄土思想」の論稿、また山田には『遊心安楽道』偽撰を前提とし元暁の『無量寿経宗要』と『阿弥陀経疏』等を以て元暁の往生の行業論を論じた[1965]「曇鸞教学と元暁の浄土教思想」もある。そして同じく偽撰を前提とした松林弘

之[1966]「新羅浄土教の一考察」、[1967]「新羅浄土教の研究」及び[1967]「朝鮮浄土教における十念説の展開」、『遊心安楽道』の後代人の仮託説に若干言及する松林弘之[1973]「新羅浄土教の特色」、そして偽作の根拠として、元暁の著作の大部分が正倉院文書に記されているにもかかわらず『遊心安楽道』が記録されていないこと、大寶積経発勝志楽会と不空大灌頂光真言の文が引用されていること、『遊心安楽道』に迦才の浄土論の文を数カ所引用していること等を挙げ『遊心安楽道』は元暁滅後に凡夫往生説を権威づけるために元暁作とされたものとする恵谷隆戒[1974]「新羅元暁の遊心安楽道は偽作か」、例外として元暁が『不空羂索神変真言経』と『大寶積経』が訳出される707年乃至713まで生存していたとする望月信亨(『中国浄土教史』)を承けて元暁と善導の浄土教学を比較した岸覚勇[1967]「元暁浄土教と善導教学の比較」があるが、反対論文としては引用されている『不空羂索神変真言経』には『不空羂索呪経』や『不空羂索神呪心経』という異訳が、また『大寶積経』にも『発覚浄心経』という異訳がすでにあり、元暁が当初『発覚浄心経』と『不空羂索呪経』を引用していたのを元暁滅後に、誰かが『不空羂索神変真言経』と『大寶積経』に改竄したとする金雲学[1973]「新羅元暁の文学観」と、それを承ける鄭学権[1976]「元暁大師の十念義について」がある。落合俊典[1980]「『遊心安楽道』日本撰述説をめぐって」はそれまでの先行論文を整理し真撰説の難点を論じ、日本撰述説の可能性を示唆したものである。

撰述地に関しては、章輝玉[1985]「『安心遊楽道』考」のように成立時期を713年よりさほど下らず新羅人によって中国で作られたとする論稿もある。

ここで韓普光[1991]「『遊心安楽道』の諸問題」は、それまでの偽作真作説、全ての研究を整理し、『遊心安楽道』の流通本である明暦四年本と近年存在が確認された来迎院本との内容の比較、『遊心安楽道』の組織、思想背景などを論じたもので、撰述の時期は義寂(7世紀末-8世紀所頃)以降で、場所は内容が新羅の浄土信仰の流れとともにし、韓国半島でよく使われている言葉が使用されているとして、新羅で撰述されたものではないかとする。依然、決着がつかない感があるが、近年では、義天の日本

を含めた典籍蒐集期間(1073~1090)と叡山で『遊心安楽道』が盛んに研究され始めた時期がほぼ同じであるが、『義天録』に『遊心安楽道』が記載されていないことを問題とした愛宕邦康[1994]「大覚国師義天と『遊心安楽道』」、同じく愛宕の包紙から『遊心安楽道』来迎院本が良忍手扱かどうか論考しようとした[1995]「『遊心安楽道』来迎院本の包紙」等の論稿がある。

その他の元暁の浄土思想に関する論稿としては、元暁の伝記を論じ、『遊心安楽道』が偽作であることを立証し、次に『両卷無量寿経宗要』と『阿弥陀経疏』によって元暁の浄土教思想の特徴を、浄土の因果や浄土に往生する機根を極めて高く評価していることとする恵谷隆戒[1976]「新羅元暁の浄土教思想」、元暁は菩提心正因を強調しているが自力往生というよりは他力本願を強調しているとする康東均[1979]「元暁の浄土思想に於ける声聞観」及び同[1981]「元暁の浄土思想に於ける生因説」、そして元暁の弥陀浄土思想と弥勒浄土思想の特色とその思想的背景を論じようとする比良祐之[1985]「新羅元暁の浄土教」等がある。尚、元暁の弥勒思想に関する専論は管見のため李箕永[1980]「元暁の弥勒信仰」(『韓国文化』2-3)を知るのみである。

近年、元暁の浄土思想の論理的基盤が『大乘起信論』にあるとして『起信論疏』と『無量寿経宗要』を中心に元暁の浄土思想を積極的に論じているのが藤能成であり、[1991]「元暁における信の問題」、[1995]「元暁『両卷無量寿経宗要』における誓願と菩提心について」、[1997]「元暁の浄土思想と仰信」、[1998]「元暁と五姓各別説」等があり、また元暁の仏土論が『摂大乘論』と『大乘起信論』を基礎としているとする梯信暁[1991]「元暁の仏土論」の論稿もある。

最後に、近年で元暁の浄土思想に関して有益な論稿は、先述の韓普光[1991]「『遊心安楽道』の諸問題」であるが、1963年の『三国遺事』に記載されている願往生歌研究から元暁の浄土思想を展開する金思燁[1963]「元暁大師と願往生歌」は論文の中に『安心遊楽道』を用いてはいるものの、元暁の浄土思想を知るには一読の価値ある論稿であり、崔昌述[1996]「元暁の修行観」は願往生歌にでてくる元暁が伝えたと言われる修行法の「鉢観法」

を論じたもので、また高麗時代の知訥と了世がそれぞれ引用している元暁の弥陀證性偈と澄性歌から元暁の浄土思想を窺う韓泰植[1994]「新羅・元暁の弥陀證性偈について」も視点をかえた論稿である。

③元暁のその他の諸思想に関する研究

発表年代の古いものから項目に分類し整理していくこととする。

a. 金剛三昧経論

高麗大蔵経以外の海印寺版本として多くの版本があり、その中に日本で早くから散逸していた金剛三昧経論の存在も知ることが出来たとする小野玄妙[1911]「元暁の金剛三昧経論」を筆頭に、金剛三昧経論の専論ではないが元暁と金剛三昧経との関係に言及し、『金剛三昧経』は648年以後から665年頃までに中国で撰述されたものではないかとする水野弘元[1955]「菩提達磨の二入四行説と金剛三昧経論」、金剛三昧経論の中に真諦訳の『摂大乘論』の如来蔵解釈が窺われるのではないかとする千明東道[1983]「金剛三昧経論の一考察」、元暁が「無二に偏らず不守一に不守一に傾かない無二而不守一」という思想構造を『金剛三昧経』の根本思想と捉えただけではなく、それが元暁の和諍思想の成立根拠となったとする佐藤繁樹[1994]「元暁の『金剛三昧経論』に於ける論理構造の特色」がある。また近年、元暁の釈論の基となる『金剛三昧経』が新羅で著されたとする見解もあり(韓国・東国大学の金煥泰は作者を恵空とされ、柳田聖山は韓国で発表した「金剛三昧経論の研究」では撰述処は韓半島で新羅人によるとされる)、それをうけて金剛三昧経論の作者は大安ではないかとする韓泰植(普光)[1996]「韓半島で作られた疑偽経について」、及び石井公成[1998]「金剛三昧経の成立事情」がある。

b. 二障義

大日本統蔵経及び大正新修大蔵経古逸部にも収載漏れとなった元暁の『二障義』が大谷大学所蔵に写本として蔵されているのを紹介し、『二障義』が元暁教学研究に際して貴重な資料であること、また法蔵の五教章断

惑文齊義が『二障義』によったのではないかと論じたのが横超慧日[1940]「元暁の二障義について」である。その後、横超慧日は村松法文と共に、横超慧日・村松法文編著[1979]『新羅元暁撰二障義』を出版する。これは、本文篇と研究篇とに分け、本文篇には二障義の原本に句読点を施したものを載せ、研究篇には先の横超の論稿と二障義の略科、及び本文の校注を載せたものである。この書評・紹介が吉津宣英[1981]「横超慧日・村松法文編著『新羅元暁撰二障義』」である。書評・紹介ではあるが「元暁における玄奘所伝の法相唯識学の比重の大きさと元暁教学の法蔵への影響」等が述べられているという内容紹介にとどまらず、元暁の思想の中での二障義の位置、及び元暁研究の課題にまでも言及しており有益な論稿である。

また第七識が新訳と旧訳から二障義に如何に取り入れられたかを論じたのが永吉博人[1983]「元暁『二障義』の研究」であるが、これは大部の論文の一部概要のみがみられるだけで惜しまれる。

c 判比量論

判比量論に関しては1967年に神田喜一郎『判比量論』が刊行されたとするが管見のため未だ眼目する機会を得ないでいる。

富貴原章信[1969]「元暁、判比量論の研究」は、判比量論の伝世問題から、本文とその和訳、善珠や蔵俊等の著述に引用されている判比量論の逸文を整理したもので、追記として判比量論の新出断簡を載せる論稿であり、判比量論の研究のみではなく元暁著述の逸文、及び逸文からの元暁思想を研究するに際しても参照すべき論稿である。

次の高橋正隆[1986]「本朝目録史考」は、断簡が発見された『判比量論』の伝本の経緯を探るために現存の目録を整理したもので、富貴原の論稿と併せて参照されたい。

d 涅槃宗要

涅槃宗要に対する専論は木村宣彰[1977]「元暁の涅槃宗要」が初出であろう。まず涅槃宗要の持つ意義を述べ、次に涅槃宗要の検討から元暁の涅槃義・仏性義が慧遠の説を外形的・形式的に継承・土台としたものである

としながらも、元暁の独自性を論じた論稿であり、同[1977]「元暁の涅槃経観」は前稿の要約である。

次に李平来[1982]「『涅槃宗要』の如来蔵説」は、元暁の如来蔵思想を『涅槃宗要』から窺おうとしたもので、『大乘起信論』の「一心」を根幹として一心こそ仏性の体であり、それが一切衆生に遍在しているというところに元暁の如来蔵思想が窺われるとする論稿である。同『大乘起信論』の衆生心と『涅槃経』の仏性をともに一心と見なして元暁の思想が形成されたとする李平来[1980]「元暁の真如観」もある。尚、未見であるが木本清史[1990]「元暁の涅槃経解釈について」があるとされる。参照されたい。

e 法華宗要

『法華宗要』に関する研究は、先ず『法華宗要』が三乗と一乗との相即、総和思想を説くものであること、及び『法華宗要』で吉蔵の『法華遊意』の説を引いていると述べた金昌奘[1979]「元暁の法華宗要について」、元暁が三乗一乗を本来同一性のものと考えていた、法華一乗を同教一乗とみていたとし、元暁の一乗の解釈は吉蔵の『法華遊意』から受け継いだものとする任禹植[1983]「法華宗要における一乗説」があり、それ等に対して徐補鐵[1985]「法華宗要の研究」では、二論文の和諍思想に対する言及に疑問を呈し、『法華宗要』中の三車四車に関する部分を整理しながら元暁の和諍思想の特色を論じている。

次に、平井俊英[1987]「元暁の法華宗要」は、先ずは『法華宗要』の中に『法華遊意』からの引用があることを示し、元暁が『法華遊意』の成立母胎である『法華玄論』をも参照したのではないかとし、『法華宗要』と『法華玄論』の題目対比から六門分別の五門の対応関係を指摘した論稿である。それ等先行研究を承けて、『法華宗要』を中心として、その他元暁著述の法華経引用回数、撰述時期、及び天台関係の引用の頻度から元暁の法華経観の推移を論じてみたのが拙稿[1990]「元暁の法華経観」、[1990]「元暁著述に於ける天台の影響について」、[1991]「元暁の法華経観に於ける諸問題」等一連の論文である。

f 教判思想

元暁の教判観は『華嚴経疏』によって知られるとされるが現存は断簡しかなく、従って『涅槃宗要』、『法華宗要』、『大慧度経宗要』によって窺うこととなる。よって、先述のd涅槃宗要、e法華宗要での論稿も、木村宣彰[1977]のように元暁の教判観に言及するものが多いのであるが、専論としては金昌奘[1979]「元暁の教判観」が纏まっている。また金昌奘には元暁の教判観と吉蔵の教判観を整理し、元暁が吉蔵の教判思想の影響を受けたのではないかとする金昌奘[1980]もある。

g 律思想

蔡印幻[1969]「新羅に於ける菩薩戒観について」は、現存の元暁、義寂、大賢の『梵網経』に関する註疏を整理し、新羅仏教に於ける菩薩戒観の概要を述べたもので元暁の戒律思想の専論ではないが、元暁言及に多くを費やし、「特に元暁大師が理論の形成のみならず実際に身をもって大衆教化のための菩薩行を行じて或いは大瓢を叩き千村万村を歌い且つ舞いながら化詠して上求菩提・下化衆生する無碍の菩薩道を具現したことは現代の我々にも多大なる示唆を与えるものである」と新羅の戒律思想における元暁の存在を高く評価している論稿で、同[1971]「新羅の戒律思想について」は、元暁の戒律思想を中心に前稿を更に詳細に論じたもので、元暁の菩薩戒観が新羅の大乗戒律思想を代表し要約しているとする論稿である。更に先に紹介した『新羅仏教戒律思想研究』という書中第二章第六節に「元暁の戒律思想」が掲載されており参照されたい。

さて蔡氏は「元暁の戒律思想」中、元暁の戒律思想を窺うことができるものとして『菩薩瓔珞本業経疏』、『梵網経菩薩戒本私記』、『菩薩戒本持犯要記』、『大乘六情懺悔』、『発心修行章』を挙げているが、実際には『菩薩戒本持犯要記』を以て元暁の戒律観を述べ、『梵網経菩薩戒本私記』には言及していないのであるが、その後、『梵網経菩薩戒本私記』は元暁の真撰ではないとする論稿が木村宣彰によって発表されている。木村宣彰[1980]「菩薩戒本持犯要記について」は、義天録やその他の目録に『梵網経菩薩戒本私記』の書名が記されていないことと、『梵網経菩薩戒本私記』と『菩薩戒本持犯要記』では主張・見解が異なり同一人の思想とは思

われないとしたものであり、続いて木村は『菩薩戒本持犯要記』を新訳の瑜伽戒本の日讀毀他と旧訳の梵網戒本のそれとの両者を併せ総合して組織したものとして元暁の『菩薩戒本持犯要記』を中心に元暁の菩薩戒に対する見解について論じている。

h その他の思想

水尾現誠[1979]「元暁の勝鬘経解釈について」は、凝然が散逸の元暁の『勝鬘経疏』を引いている逸文を整理し、元暁の勝鬘経の十大受解釈が吉蔵や他の諸師の解釈と異なるが、564年に長安で書写された写本と同様であり元暁独自の解釈ではないとする論稿である。

元暁の散逸書の復元に関しては、近年、韓国での金相鉉の研究が顕著であるが、日本で発表されたものとしては『般若心経疏』の復元の崔凡述[1973]「元暁大師『般若心経復元疏』」がある。

鎌田茂雄には元暁の華嚴及び唯識思想に関する論稿もあるが、その紹介は他の分担者の紹介に譲るとして、元暁のその他の思想として鎌田茂雄[1981]「『十門和諍論』の思想史的意義」は、『十門和諍論』の断簡を考察し、空有論における吉蔵と基の影響と、元暁の空有会通の思想が法蔵『華嚴五教章』における空有の思想と関連があることを論じ、最後に『十門和諍論』の国訳を付した論稿で、元暁の如何なる思想を論じる際であっても必読のものである。

その他に、元暁の思想と言うよりも、元暁の史跡を巡りながらエッセイ風に元暁の歴史を綴った李箕永[1980]「聖僧・元暁の思想」、如来蔵を実相般若、あるいは般若と同義語と解釈したのは元暁が先駆であり、中国仏教の般若観に影響を与えているとする李箕永[1981]「元暁の実相般若観」、そして元暁の儒教と老荘思想に対する態度から、和諍思想の特質と成立事情を論じた石井公成[1983]「元暁と中国思想」等がある。尚、石井公成には、『起信論疏』及び『起信論別記』等を中心として、元暁著述の引用経論の考察から元暁著述の成立順次を解明しようとした研究があるが、重複を避けるためその紹介は『大乘起信論』の分担者に譲る。

(2) その他諸僧

通伝としては、出典は明記していないが、南北朝時代の入唐者として円光・玄光、唐時代の入唐者として慈蔵を初めとして順環・大賢等の事跡を紹介する脇谷攝謙[1910]「支那に学びし韓国の僧」と、元暁、義湘、そして円測の伝を紹介する鎌田茂雄[1980]「新羅の仏教思想」がある。その他に鎌田の一連の著述が詳しいが、ここでは通伝ではなく専論のみを紹介することとする。

① 円光

李箕永[1980]「円光の思想的寄与」は、円光の生没年及び求法年には言及せず、帰国後に新羅仏教へ与えた思想的影響についての論稿であり、拙稿[1994]「新羅円光法師伝再考」は、現存史料により円光の生没年及び出国・帰国の年次を整理しながら各史料間の矛盾を指摘し、それに『花郎世紀』の記載を加えて、円光の生年566年、出国589年、帰国600年、没年649年と推定したものである。尚、円光に関しては本稿第4章第3節「新羅花郎と仏教」にも関連の論稿があり、併せて参照されたい。

② 慈蔵

慈蔵伝の問題の一つとして『統高僧伝』を参照している『三国遺事』が、『統高僧伝』に記されていない慈蔵の五台山登拝を記していることが挙げられる。江田俊雄[1957]「新羅の慈蔵と五台山」は、慈蔵の五台山入山を肯定し、五台山における文殊感応と、感応による皇龍寺九層塔の建立等の事跡から、慈蔵の人間像と国家意識を探ろうとしたもので、[1958]「新羅慈蔵による文殊感得の布教法」は、前稿に続き、慈蔵が文殊感応による「新羅仏土説」と「新羅王種印度刹帝利種説」による布教法によって、仏教の民衆化と新羅王家との関係の強化を図ったとする。

李成市[1995]「新羅僧・慈蔵の政治外交上の役割」は、江田の論稿も視野に入れ、慈蔵関係史料の再整理と新羅史研究の成果を以て、慈蔵が7世紀中葉における新羅の政治外交上の諸改革にはたした役割を論じたもので、五台山登拝に関しては登拝の有無よりも、二系統の史料の記事の成立背景を考察し「新羅側にのみ伝来された慈蔵の五台山における神秘体験は、潤

色や造作の手が加わっているとしても、新羅の秩序世界に根拠を付与する言説であることに疑問の余地はなく、慈蔵が仏教上の言説をかりて新羅王を中心とする威信の体系を維持・再構築しようとしたことは、九層木塔の建立目的からも、十分ありえたとする。

次に中国に於ける戒壇の創始と変容に関して述べ、新羅の最初の戒壇創始を慈蔵に帰することに年代的に疑問を呈したのが横超慧日[1941]「戒壇について(中)」であるが、その問題と慈蔵の戒律思想全般に関しては蔡印幻[1977]「慈蔵の戒行」(『新羅仏教戒律思想』所収)が詳細である。

③ その他

妻木直良[1913]「新羅の高僧円測法師」は、崔致遠の『智異山華嚴寺事蹟』と宋復の『舍利塔銘序』から円測が新羅の貴族の出身とし、また『宋高僧伝』での円測悪評の原因を述べたものである。円測の思想に関しては徐徳仙[1996]「円測の『解深密経疏』における八識説について」、同[1996]「円測著『解深密経疏』における八識の研究」等があるが、詳細は唯識分担者の稿を参照されたい。

蔡澤洙(印幻)[1973]「新羅大賢と『古述記』について」は、大賢の伝記の整理、諸目録による大賢の著書の整理、『梵網経古述記』の検討から大賢の著述方法と、そして『梵網経古述記』を引用している日本諸師の著述の整理から日本に於ける大賢教学の影響を論じたもので、[1977]「大賢の戒学」は、前稿に『菩薩戒本宗要』の項目と『菩薩戒本宗要』の訳註解をも加え、更に詳細にしている。

江田俊雄[1934]「新羅の通倫と「倫記」所引の唐代諸家」は、通倫が新羅人であることの根拠を述べ、次に通倫の『瑜伽論記』で引用する諸師の著述を整理し、『瑜伽論記』の成立を714年以前の20年間とし、生存を650年より60年若しくは70年間とした論稿であり、この論稿により多くの新羅僧の存在が知られる。

今西龍[1912]「新羅僧道説に就いて」は、道説伝の諸資料を整理し道説伝の成立の史的順序を考察したもので、道説伝は崔惟清撰の碑文が高麗王室との関係説話は高麗初期に假作されたものではあるが、その他は正確で

あるとする。次に道説の関連論稿に『高麗史』の道説撰とされる識書所引記事から高麗王室と仏教との係わりを探る梁銀容[1980]「『高麗史』所引の道説識記について」がある。

6. 新羅浄土思想

(1) 著述

恵谷隆戒[1976]『浄土教の新研究』は、新羅浄土教の専著ではなく中国・韓国・日本三国の浄土思想研究ではあるが、平安・鎌倉時代の浄土教は新羅浄土教に依ることが極めて多く、新羅浄土教は日本浄土教を育成する媒体となったものであって、これを研究しない限り、平安・鎌倉の浄土教を解明することが出来ないところに新羅浄土教の価値があると、中国や新羅の浄土教古佚書の長文が多数引用されている源隆国の『安養集』と平安・鎌倉時代の浄土教典籍から、唐の道閑撰『観無量寿経疏』及び竜興撰『観無量寿経記』や日本の元興寺智光撰『無量寿経論釈』の復元ばかりではなく、新羅の法位撰『無量寿経義疏』と義寂撰『無量寿経述義記』の復元をも附したもので、それら史料によって第五章に「新羅法位の無量寿経義疏の研究」、第六章に既に本稿で紹介しているが「新羅元暁の浄土思想」、第七章に「新羅義寂の無量寿経述義記」、第八章に「新羅憬興の浄土思想」等の論稿が収録されている著書である。隋・唐時代の浄土教研究は観無量寿経中心であり、統一新羅時代は無量寿経中心、平安・鎌倉時代は観無量寿経・無量寿経両経中心であり、そして、中国浄土教では九品往生の問題、韓国では弥陀の四十八願、特に第十八・十九・二十の三願が重要問題とされている、とするのが恵谷の立場であり、その立場に立って論じられたものである。新羅浄土教は浄影寺慧遠の系統に属するものと玄奘・慈恩の系統に属する二系譜があり、円光・慈蔵・義湘・義寂・法位・玄一が前者に属し、円測・憬興・太賢・遁倫などが後者に属するとし、また法位を新羅浄土家の先駆者とし、中国の道綽・善導流の観無量寿経中心主義の浄土教思想は義寂以外には導入していないこと、憬興の浄土思想は浄影寺慧遠、

元暁、法位、義寂等の説を厳格に批判しながら自説を主張し、従来の「弥勒所問経」の慈等の十念を尊重する思想を排除し称名の十念を強調していること等を論じている。尚、恵谷の本著所収の新羅浄土教に関する幾つかの論稿、及び復元本の報告は、『仏教大学研究紀要』35・40、及び『日本仏教学会年報』25等に既に1960年前後に発表されており、本著出版以前にいち早く新羅仏教研究者に示唆を与えていたとされる。

渡辺顕正[1978]『新羅・憬興師述文贊の研究』は、憬興の『無量寿経連義述文贊』(以下述文贊)所引経論、及び『述文贊』を引用している日本の諸師の著述を整理し、『述文贊』の科段とその大要を整理し、次に憬興の浄土思想の特質を明らかにすると共に、『述文贊』と親鸞の『教行信証』を対照して親鸞に於ける憬興の影響を窺おうとし、最後に憬興の散逸の『観経疏』を引用の諸本から復元し、善導の『観経疏』との対照を附したものである。尚、渡辺には本著と関連する憬興に関する論稿があり、憬興の思想に関する言及は後項で紹介することにしたい。

韓普光[1991]『新羅浄土思想の研究』は、自序で韓国仏教の性格を、信仰的には浄土信仰が主流であり、教学的には華嚴教学が主旨であり、実践的には座禅修行が本懐である、とするが筆者はこれ以上の至言を知らない。そして、韓普光は前出の恵谷の新羅浄土教を浄影寺慧遠系と玄奘・慈恩系との区分を、新羅人である元暁の如来蔵系の浄土教学と百濟人である憬興の唯識系の浄土教学という区分で見べきであると、元暁の『無量寿経宗要』と『阿弥陀経疏』、憬興の『無量寿経連義述文贊』、撰者未詳の『遊心安楽道』等を中心に、その他新羅浄土教関係史料を整理し、新羅浄土思想を究明しようとしたものである。本書は四章となっており、第一章「韓国仏教伝来と浄土信仰の受容」では、三国時代の仏教伝来と浄土思想の受容、そして統一新羅以降に阿弥陀信仰が広がった背景と要因を述べ、第二章「新羅浄土思想の研究業績についての再検討」では、元暁と憬興、及び『遊心安楽道』を中心として、先行の研究業績を検討し、第三章「新羅浄土思想の諸問題」では、中国諸師の著述と元暁等の説を比較することによって新羅浄土教の独自性を論じ、第四章「新羅における念仏の実践方法とその類型」では、新羅浄土教の実践面の、その思想的根拠を述べ、最後に

現行の『遊心安楽道』(明暦本)と新発見の『遊心安楽道』(来迎院本)とを対照し、関係諸本と合わせ「諸本対照『遊心安楽道』」として附したものである。

最後に、韓国の弥勒信仰に言及したものとして金三龍[1985]『韓国弥勒信仰の研究』がある。李朝までの論稿で新羅時代の専論ではなく当該部分としては、第二章「三国時代、弥勒信仰とその歴史的位罫」、第三章「百濟弥勒信仰と戒律思想」、第四章「百濟弥勒信仰の特性とその歴史的展開」というように百濟を中心に論じたものであるが、高句麗の弥勒信仰は北魏仏教に近い弥勒信仰であり、また新羅の弥勒信仰は元暁の著述で分かるように中国や日本で流行した唯識系統の弥勒信仰と、『三国遺事』の弥勒が花郎として現れたという説話や、弥勒信仰によって現身成仏するという努朕夫得説話等から分かるように実質的に開拓的側面を持っているとし、百濟の弥勒信仰は更に具体的且つ積極的に弥勒の国土的具現をその理想としているといい、三国それぞれの弥勒信仰の特徴を詳細に論じようとしている。尚、資料編にある弥勒信仰の全国分布状況の表と調査資料の写真は有益である。

(2) 論文

① 新羅浄土教通史

新羅浄土教に関する論稿で、早いものとして末次明信[1930]「新羅時代の浄土教に就いて」(『浄土学』1)があるが未見である。

江田俊雄[1939]「新羅仏教に於ける浄土教」は、新羅社会に於ける浄土教の信仰状態を探るため『三国遺事』の記事の整理から民間の兜率歌と呼ばれる郷歌の存在から浄土教信仰としては弥陀信仰の外に弥勒の兜率往生の信仰が行われていたとし、研究状態を探るため諸目録によって新羅諸師の浄土関係著述を整理し、最後に元暁の現存の浄土関係の著述に関して略解を施したものである。

三品彰英[1961]「新羅の浄土教」は、『三国遺事』所載の浄土教関係記事を全てではないが、抄出し註解を施したものである。

以上が新羅の浄土教に関する比較的早いものであるが、これらは主に教学よりは民間信仰の側面からの考察であるとし、中国浄土教との交流を通

じて独自に展開される十念論・浄土論等を信仰と教学の両面から考察しようとしたのが源弘之[1973]「新羅浄土教の特色」である。源は浄土信仰の形態を探るべく『三国遺事』から浄土教信仰に関する記事を整理し、弥陀・弥勒の信仰が対立することなく調和されて発展しているのが新羅浄土教の信仰形態の特色であるとし、次に新羅の浄土教に関する著述の整理と先述の恵谷の研究成果から、新羅浄土教の中心課題は、弥陀經典の場合は浄土往生の正因、四十八願の問題、大經第十八願の十念と観經下々品の十念との問題、別時意、浄土、三輩九品往生の階位の問題、三種の浄業と十六正観をどのように取り扱うかという問題等であったようであるとし、章を改め十念論の源流と展開、そして中国における弥陀と弥陀の浄土優劣論とそれに関する朝鮮浄土教の立場等を論じている。

恵谷隆戒[1976]「韓国浄土教の特性」は、新羅から高麗時代に亘る韓国浄土教の特徴を論じたもので、恵谷の説は先に著述で紹介したものと大概同内容である。

李鍾益[1979]「韓国仏教に於ける念仏と禪」は、韓国仏教における念仏と禪の関係は新羅時代の浄土思想から始まることとして、新羅の弥陀浄土関係の著述を整理することによって新羅では浄土宗は別に一の宗派として分立することはなかったが弥陀の信仰や念仏修行を兼行していたとし、高麗時代・李朝時代の念仏と禪の関係を史的に論じたものである。

次に、新羅の念仏に関して論じたのが韓泰植[1990]「新羅における萬日念仏結社の成立と展開」である。念仏の回数を重視する数量念仏は中国と日本で行われ、念仏の日数を重視する日数念仏が韓国で行われているとし、韓国でのそれは新羅時代に日数念仏が念仏結社として組織され体系化されたことによることとして、その中で代表的な萬日念仏結社に関して『三国遺事』の説話を中心に論じたものであり、新羅の浄土信仰の起源は真平王代の恵宿で、恵宿の行蹟の中に念仏結社的な要素がみられるとし、次に元暁の『阿弥陀經疏』の中に念仏日数重視の思想がみられることから、元暁のその思想が萬日念仏結社を成立させる思想的淵源となったのではないかとしている。尚、韓普光には『三国遺事』二恵同塵条を依拠として恵宿を新羅最初の弥陀信仰の実践者とする[1984]「新羅・恵宿の弥陀信仰について」があ

る。

次に梯信暁[1993]「新羅浄土教の特徴に関する一考察」は、『無量寿経』の疏を著している元暁・法位・義寂・玄一・憬興の五師の著述から新羅浄土教の特徴を捉えようとしたもので、新羅浄土教が中国と異なり、『無量寿経』中心の浄土研究であり、それは『両卷無量寿経宗要』を著した元暁に起因するもので、法位・義寂・玄一がその立場に立っていると、『観無量寿経』ではないのは、撰論師の批判的となった『観経』を避けたことと、『観経』の教説が凡夫のみを対象とするのに対し、『無量寿経』は凡夫・聖者の両方を対象として説かれた経であると考えたためであるとする。しかし憬興は『無量寿経』教説を低く判定することによって、『観経』と『無量寿経』とを一連の教説とみなし両者に優劣を認めていないのが一人違う等としている。更に梯には十念論を中心に新羅浄土教の展開を整理し、元暁よりも法位が、法位よりも義寂が、そして義寂よりも憬興が十念をより易行の立場として捉えているとする[1994]「新羅浄土教の展開(一)」がある。

③ 弥勒信仰

弥勒信仰の専論ではないが、八百谷孝保[1937]「新羅社会と浄土教」は、骨品と官位と官職との階級的相互関係から新羅が階級社会であったことを述べ、その新羅社会と仏教を考察する際に中心となるのが浄土教であるとし、新羅時代の阿弥陀及び弥勒関係の著述を整理し、弥勒信仰は階級制度の存する新羅社会に於いて奴婢迄も貴族と等しく同所に往生し得るのであるから民衆に多くの信仰を得たとし、弥勒信仰は花郎集団の指導精神となることで新羅社会と結合したとする論稿である。

松林弘之[1968]「朝鮮浄土教の研究」は、中国と新羅の弥勒と弥陀の優劣難易論の流れから、憬興の思想を以て新羅の浄土教の発展を論じたものである。

日本での新羅の弥勒信仰に関する専論は趙愛姫[1973]「新羅における弥勒信仰の研究」が初見である。『三国遺事』から弥勒信仰に関する記載を下生信仰と上生信仰、そして花郎と関連する説話とに区分して、新羅の初

期仏教に於いては貴族が説話の中心人物で下生信仰が強いが、後代に徐々に上生信仰が見える頃に一般民衆を中心とした説話になっているとし、次に新羅の弥勒思想史上において、弥勒信仰と最も深い関係にあったものの一つとして花郎制度を挙げ、花郎を精神的に支えたものが弥勒信仰であったとするものである。ただ残念なことは大部の論文中の二章分しか掲載されておらず第二章「新羅の王室仏教と弥勒信仰」、第三章「新羅の大乗仏教と弥勒信仰」がみられないことである。尚、趙愛姫には新羅の弥勒仏国土思想が花郎制度を作り出したとする[1974]「上代新羅の弥勒浄土信仰について」がある。

田村円澄の新羅の弥勒信仰に関する論稿では、弥勒像及び半跏像の制作年次に注目し、新羅の弥勒下生信仰は、半跏像を帰依・礼拝の対象とするのみならず、弥勒信仰の同信集団を構成していたとして花郎集団に言及する[1981]「新羅の弥勒信仰」を始め、前稿を講演用に手を加え公開講演で発表したものの再録と思われる[1982]「古代朝鮮と弥勒信仰」、更に詳細にした[1986]「半跏思惟像の研究」等がある。この中で「半跏思惟像の研究」の一読を勧めたい。

最後に、三国時代の弥勒信仰の展開が末法思想の広がりに関連するものではなかったのかとする盧官坪[1991]「三国時代(朝鮮半島)の仏教受容」がある。

④ 憬興・義寂、その他

義寂に関しては未見ながら1940年頃に春日礼智によって、源隆国撰『安養集』を中心として日本浄土典籍中の義寂『無量寿経述義記』の引用を蒐集された『無量寿経述義記』の輯逸本が京都の真宗学研究所から出版されているとされる。春日礼智[1973]「新羅の義寂とその『無量寿経述義記』」は、その輯逸本をもとに義寂の浄土思想を解説し、義寂伝にも言及したものである。尚、『無量寿経述義記』の輯逸本に関しては先述のように恵谷隆戒の復元本制作の研究もあり、併せて参照されたい。

また未見であるが望月信亨[1946]「新羅義寂の著書並びに無量寿疏」があるとされる。

次に義寂の『無量寿経述義記』と憬興の『無量寿経述文贊』との撰述の前後問題を論じたのが松林弘之[1966]「朝鮮浄土教に於ける憬興・義寂の一考察」である。松林は望月信亨が『支那浄土教理史』で、また石田充之が『浄土教々理史』で、憬興は義寂が第十八願下品、第十九を上品、第二十を中品の願とする説を引いてそれを斥けている、としているが、それは1699年に『無量寿経述文贊』の奥書に本書が義寂・法位の疏を引いていると義山(1647-1717)が書いているのを承けたためなのではないかとし、了慧(1243-1330)の『無量寿経鈔』によると義寂は十九・二十は品位に配していないこと、義寂の『無量寿経述義記』で707年から709年の間に訳出された『不空羂索経』を引いていること、748年に日本で書写されていることから撰述年代は707年から748年に絞ることが可能であること、憬興の『無量寿経述文贊』の撰述は700年以前とみて差し支えないこと等から、義寂が著す以前に憬興が著していたとする論稿である。

梯信暁[1989]「新羅義寂『無量寿経述義記』の一考察」は、義寂『無量寿経述義記』での世親の『浄土論』の扱い方と『無量寿経述義記』の新羅浄土教での位置に関して論じ、新羅浄土教は法相宗に属するものと考えてよいのではないかとし、義寂は『無量寿経』弥陀果徳の文に説かれる浄土を受用土と判じこれを『浄土論』を用いて釈したがこれは元暁によるもので、法相宗の教説の範疇を逸脱するものではなく、玄一・憬興に影響を与えた等々論じたものである。

憬興に言及する箇所が見られる早期の論稿は横超慧日[1939]「支那浄土教に於ける三乘観」であろう。横超は無量寿経と小阿弥陀経には極楽に声聞が無数存在すると説き、観無量寿経には極楽に往生した後阿羅漢果を得る者がいると説かれているが、発菩提心が往生の因であるならば極楽に声聞が存在する筈がなく、また逆に極楽で声聞果を得ることがあるとするならばそこに往生する因が発菩提心であるというのは無意義であるとし、この両種類の説に対する当代諸師の見解を五説に整理し、第四説に「第四は極楽を大乘国と見て声聞は不定性の声聞なりとする説、これは元暁と憬興との主張する説」として紹介する。次に声聞の往生に関する当時の説を整理し、元暁と憬興に関しては「元暁が定性声聞も無余涅槃より出でた後に

は発菩提心して往生すと許したのに対し、憬興は無余廻心を許さず定性声聞永不成仏を主張するの根本的差異を呈したが、これは唐初に於ける一乗三乗権実論争の反映したものとし、その独自性を認めていない論稿と思われる。

しかし、憬興の『無量寿経述義文贊』の無量寿経註釈書としての位置と、韓国浄土教における役割、翻訳に際しての態度、往生人、往生の時間論、念仏の念と称の価値判断、往生因としての諸行と念仏の比較、西方易生等の問題から憬興の教理的特徴を論じた賀幡亮俊[1967]「憬興の無量寿経疏について」が発表されている。

また先述の1978年に『新羅・憬興師述文贊の研究』を出版した渡辺頭正には、その後の、憬興の『無量寿経述義文贊』(以下述文贊)及び『三弥勒経疏』の引用経論を通して憬興の著述の特徴を述べ、『述文贊』における科段の名目は吉蔵、元暁、慧遠を参照したとする[1980]「憬興師と唐仏教の交渉」、憬興の没年を『述文贊』で新羅に700年前後に伝来されたと考えられる義浄の『南海寄帰内法伝』を引用していることから聖徳王代(702-737)とし、憬興の『述文贊』で第十八願下の逆謗除取論について批判している十三家の説を紹介する[1985]「憬興師の無量寿経第十八願観」がある。尚、論稿中には、松林が義寂が著す以前に憬興が著していたという説には言及していないが、憬興は義寂を引用すると明記する。更に、『無量寿経』の「胎化段」中の五智の解釈を中心に元暁と憬興の五智に対する見解を論じ、憬興は元暁を批判しているとする[1989]「新羅浄土教家の大経「胎化段」観」がある。

更に、憬興の仏身観を慧遠との比較から論じる姜昌鍋[1995]「憬興の仏身観」、未見ではあるが爪生津隆雄[1976]「憬興師所覽の大経と親鸞聖人」があるとされる。

(5) 郷歌研究

新羅郷歌の解説は小倉進平[1929]「新羅郷歌と史談の研究」があり、新羅浄土教の言及に郷歌を用いることは、早くは先述の八百谷孝保[1937]「新羅社会と浄土教」、江田俊雄[1939]「新羅社会に於ける浄土教」にも若干見られるが、郷歌を中心に郷歌から新羅浄土思想の展開を窺おうとしたの

は金東旭[1960]「新羅浄土思想の展開と願往生歌」が初出である。金東旭の論稿は既に韓国で発表されていたもので李達憲・三品彰英の抄訳であるが、恵宿から元曉までの浄土思想の展開を文献資料で整理し、次に郷歌に現れている浄土思想を概観し、願往生歌の作者を広徳とした手法は、既に紹介している三品彰英[1961]及び金思燁[1963]両論稿に示唆を与えたものと高く評価できるものである。

その他、『三国遺事』の広徳・嚴莊条と月明師兜率歌条を以て説話の浄土思想的特徴を窺おうとする康東均[1982]「新羅郷歌に於ける浄土思想」がある。論中、康東均も論じているが、筆者も新羅の浄土思想を考察するに当たり、註疏や僧伝の他に郷歌や説話等の史料からのアプローチも有意義なものと考え、項目を設け紹介するものである。

7. 仏教美術からの研究

以下に三国・統一新羅時代の仏教美術に関する研究を紹介したい。少し以前までは仏教史研究と思想研究と、そして仏教美術研究との研究交流が希薄であった。仏教史研究と思想研究が思想史研究として一つとなった今も、まだ仏教美術研究との交流は盛んであるとは言いがたい。しかし、仏教美術に対する早期の斎藤忠[1947]『朝鮮仏教美術考』を見ると、序説「朝鮮に於ける仏教文化発達の概観」、本論「朝鮮仏教美術各論」として、仏像、塔婆、瓦殿、銅鐘、そして寺院関係の石造物を三国時代から高麗時代にまで亘って整理し、次に後論「仏教文化より見たる上代日鮮の関係」、結論「仏教美術より見たる朝鮮古文化の特質」としたものであるが、高句麗の仏教文物が北魏の影響によることを仏像や伽藍配置そして瓦等から窺われるとし、同様の手法で百済の仏教文物に南朝とそして高句麗の影響を窺い、新羅に関しては古新羅時代の伝統と高句麗と百済の影響の共存であることを論証している。つまり史料によって知られる三国の仏教の伝来を仏教文物によっても確認でき得るということを論証されているわけである。

当時の思想と教理的背景が生み出したものが仏教美術である以上、真摯

に仏教美術の研究成果も視野に入れての研究の必要性を強く感じるものである。しかし、かく言う筆者も、仏教美術に関しては知識は乏しく、管見のため研究成果の一部のみの紹介しかできず、また的はずれの解説を恐れるものである。よって、今後、この分野の専門家の詳細な整理を期待しつつ、本稿では簡単な紹介のみすることをお断りしたい。

(1) 仏像研究

① 著作

先述のように斎藤忠[1947]『朝鮮仏教美術考』にも仏像に関する言及がある。

中吉功[1971]『新羅・高麗の仏像』は、中吉が以前発表したものを収録したもので、本項に該当する論稿は「三国時代の金銅仏」、「銅造菩薩半跏像鈔存」、「新羅の仏像彫刻」、「慶州南山の仏蹟」、「新羅彫刻覚書」、「甘山寺石造弥勒・阿弥陀像雑攷」、「華嚴寺舍利塔彫像攷」、「楡岾寺小金銅仏」、「新羅小金銅仏」、「造像銘のある新羅の鉄仏二種」、「浮石寺釈迦如来像に対する考察」等である。

二年後に出版された中吉功[1973]『海東の仏教』「海東仏教美術図彙」には40以上の仏像の図版と解説が掲載され、その中で5体の仏像の銘文を知ることができる。

黄寿永[1978]『韓国仏像の研究』も、黄寿永が以前に論文として発表したものを収録したもので「高句麗金銅仏像の新例二座」、「百済半跏思惟石像小考」、「扶余窺岩出土百済仏菩薩像」、「泰安の磨崖三尊仏像」、「忠清南道燕岐石像調査」、「ソウル出土金銅観音菩薩立像」、「断石山神仙寺石窟磨崖像」、「新羅半跏思惟石像」、「新羅南山花嶺弥勒世尊」、「軍威三尊石窟」、「楡岾寺五十三仏」、以上の論稿が図版・実測図と共にみられる。

秦弘燮[1978]『韓国の仏像』は、第一編「仏像の概念」では仏教礼拝像の種類、仏像の起源、仏像の形式等を論じ、第二編「韓国の仏像」では、仏教の伝来、仏像の伝来、記録に残る仏像を論じ、次に韓国仏像の形式を論じる前に、中国と韓国の仏像様式が密接に関連があるとして中国での仏

像の様式変遷を概観し、その上で韓国での様式変遷を論じ、第三編「韓国仏像の造像例」で三国時代から李朝時代に亘るの仏像を紹介している書である。

② 論文

以下、更にテーマごとに区分して紹介していくこととするが、その前に山本智教[1981]「仏教美術史の流れ」は、仏教美術史の流れをインドから朝鮮半島まで概観する仏教美術通論で、朝鮮半島にも若干言及し、朝鮮半島の仏教美術は Gupta 唐様式の流れを汲んだものと結論づけている。このような論著は多々あるが朝鮮仏教美術に関する論著を読む前の準備段階として必要であろう。

a 三国時代の仏像

榎本杜人[1956]「朝鮮の仏教美術」は、高句麗の無量寿仏と新羅の阿彌陀仏の年代と系統が異なるとする論稿で、藤田亮策[1956]「朝鮮三国時代の仏教美術」は、三国別の仏像の系統を整理したもので、その上で高句麗が位置から北朝特に北魏の影響を強く受けたのに対し、百濟・新羅の後半は南朝の移入文化であり、末期には隋唐の教義と芸術が加わったとする論稿である。

黄寿永[1972]「韓国三国時代の彫刻」は、三国時代の仏像を概観しながら、三国の彫刻は初期の様式習得に至る段階では大きな差別はないとする。それは三国間及び中国南北朝との各国の交流からであり、仏像の種別や材料の種類に於いて差が見られないのは三国の仏教に思想的に差がなかったからであるとする。しかし、金元竜[1990]「三国時代の仏像について」は、三国時代の仏像の様式差を、素朴な人間味という共通性を持ちながら、高句麗は北方族の抽象性を踏まえた力強い線と面に依る刺激的効果への好尚が目立ち、百濟は始めは高句麗美術との親縁を見せているが次第に百濟独自の温和な人間味溢れる南方的自然主義で特徴づけられるようになり、新羅は同じ自然主義でも先史時代以来の抽象性が底にしかれて神秘的な古拙性が目立つようになったとする。

高句麗仏に関しては、文明大[1980]「高句麗初期の仏像様式」で、1959年にソウルで発見された仏像が、中国からの輸入仏であるのか高句麗での複製仏であるのかの問題に関して論じており、久野健[1992]「平壤博物館の仏像」では平壤博物館所蔵の新羅仏と共に高句麗仏を紹介している。

百濟仏に関しては、半跏思惟像を中心とする研究も多いが、半跏像に関しては次項と8章で紹介することとする。百濟仏の専論としては、松原三郎[1977]「三国時代初期の金銅仏について」、大西修也の[1976]「百濟の石仏坐像」、同[1977]「百濟仏立像と一光三尊形式」、[1983]「百濟仏再考」等の一連の論稿がある。

b 半跏像

半跏像にいち早く着目されたのは田村円澄であろう。1972年の日韓の新羅仏教についての共同研究で半跏像を研究テーマに「半跏思惟像と聖徳太子信仰」という論稿を発表しており、それを含めた幾つかの論稿に関しては次章「日本研究のための研究」で紹介するとし、先ず田村円澄・黄寿永編[1985]『半跏思惟像の研究』には、田村円澄「半跏思惟像の諸問題」、黄寿永「百濟の半跏思惟像」、鄭永錫「韓国新発見の磨崖半跏像二例」の他、韓国半跏像を研究する前に必読の毛利久「半跏思惟像とその周辺」と宮治昭「ガンダーラにおける半跏思惟の図像」の二稿があり一読されたい。

半跏像研究を聖徳太子信仰の研究の一環として行う研究、または韓国国宝の二体の半跏思惟像と法隆寺の半跏像との関係を窺おうとする論稿も多いが、これ等も次章で紹介したい。

尚、専論として1992年から1993年にかけて発表された「韓国半跏思惟像の編年に関する一考察」という鄭禮京の論稿がある。第一章、第二章、第三章、そして第四章で完結する大部の論文である。これに対する評価はできないが、鄭禮京に対する論文として大西修也[1993]「韓国半跏思惟像の成立と尊格について」があり一読されたい。

c 統一新羅の仏像

源豊宗[1928]「朝鮮の仏像彫刻」は、新羅時代の仏像の様式を、北魏様

式と唐朝様式とに分類し、北魏様式から唐朝様式への移り変わりを論じている。

榎本杜人[1957]「新羅の阿弥陀像について」は、前年の「朝鮮の仏教美術—阿弥陀像造立の問題によせて」の続編で、新羅の阿弥陀像が如何なるものであって、高句麗仏と何処が異なるのかを論じたものである。

山本智教[1962]「新羅統一時代の仏教彫像」は、統一新羅時代の石仏及び鑄造仏に対して過去の報告書を参照しその様式の源流を探り、その源流を中国、またはインドまで遡ろうとする論稿である。仏像様式の伝来が南方から北方からかが問題となっているが、関連の論稿として軍威石窟三尊仏と南山石仏等から新羅石仏の系譜を中国に探り、また軍威仏を当麻寺弥勒像の祖系と論じる松原三郎[1967]「新羅石仏の系譜」、新羅仏の唐様式の受容と新羅化を論じた[1972]「新羅仏における唐様式の受容」があり、そして秦弘燮[1981]「古新羅時代仏像様式北方伝来の問題」等がある。

その他、統一新羅石仏の技法、丸彫と薄肉彫の併用という技法は、仏の実相を示しているもので、石中から頭部が徐々に仏が涌出するという觀念からであるとする斉藤孝[1979]「統一新羅石仏の技法」、調査報告の鄭永鎬[1980]「星州老石洞の磨崖三尊と如来坐像」、新羅だけではなく三国時代から李朝までの時代ごとの仏像の特徴を論じる正木晃[1991]「造仏にみる仏教の受容と変容」があり入門編として最適である。

最後に、思想史研究を踏まえた朴亨国の論稿がある。新羅後期の石造毘盧遮那仏坐像の七獅子蓮華座の図像を整理し、その思想的背景を論じ、新羅の密教の伝来と受容、そして新羅華嚴の六十華嚴から八十華嚴の変化等を論じる[1995]「七獅子蓮華座の図像について」、義相代の7世紀後半には降魔触地印を結ぶ阿弥陀仏が本尊として祀られたが神琳以降は中期密教の智拳印図像が導入されたとする[1995]「韓国・統一新羅時代における石造如来像の流れについて」、仏像形式の流れを思想の流れにそって論じる[1996]「韓国・統一新羅時代後期の石造毘盧遮那仏坐像について」、慶北大学博物館所蔵の砂岩造毘盧遮那仏坐像を中心に統一新羅仏の様式の変化を、新羅の思想界の動向を押さえつつ論じた[1997]「慶北大学博物館所蔵砂岩造毘盧遮那仏坐像について」、石窟庵の龕内の像群の考察から、当初

十体あった像は維摩会を構成する維摩と文殊の二体、及び善無畏系に基づいた密教の八大菩薩の八体ではないかとし、また石窟庵に善無畏系の中期密教の影響があるのではないかとし、そして、その密教を新羅にもたらした可能性があるものとして不可思議、義林、玄超などの僧名をあげる[1998]「慶州石窟庵の龕内像郡に関する一試論」、また未見ではあるが[1997]「統一新羅時代の降魔触地印像の流れについて」、[1997]「エローラ石窟庵第十一・十二窟について」、[1977]「金剛界大日如来と七獅子蓮華座」等があるとされる。尚、石窟庵に関しては南天祐[1989]「新羅石窟庵の構造と仏教」等もある。

(2) 発掘と仏教遺跡研究(仏像と金石文を除く)

① 著作

寺院址に関する早期のものは関野貞[1904]『朝鮮建築調査報告』、藤島玄治郎[1930]「朝鮮建築史論」、及び朝鮮古蹟研究会からの『古蹟調査報告』、小泉頭夫[1986]『朝鮮古代遺跡の遍歴』があるとされるが未見である。また先述の中吉功[1973]『海東の仏教』に三国時代及び統一新羅の寺址、石塔、瓦、浮屠等の図版と解説が掲載されている。次に、それまでの日韓の考古学と古代史の研究成果を網羅し、また実地調査を経て発表されたのが森浩一監修、東潮・田中俊明編著[1988]『韓国の古代遺跡—1 新羅篇(慶州)』、[1989]『韓国の古代遺跡—2 百濟・伽耶篇』、[1995]『高句麗の歴史と遺跡』、以上の三冊であり、仏教遺跡に関する歴史を踏まえた言及は益するところ多々あり、この分野での必携書である。

② 論文

慶州を中心とした韓国の発掘調査史と日本人の韓国での研究史、及び今後の問題点を論じたのが鄭永鎬[1987]「新羅美術研究における諸問題」(原文は『新羅文化』第一輯、1984年)である。

三国時代から統一新羅時代までの寺院址を論じているもので管見ながら目に付いたものは、金正基[1972]「韓国の寺院遺跡について」、金正基[1981]「仏教建築」、朱南哲[1987]「歴代の寺刹建築」、張慶浩[1993]「近

年の韓国古代寺院跡の発掘」等である。尚、張慶浩の論稿には1946年から1990年までの発掘調査が年表として附されていて有益である。

高句麗の専論は小泉顕夫[1938]「泥仏出土地元五里廃寺跡の調査」、[1958]「高句麗清岩里廃寺址の調査」、未見であるが田村晃一[1983]「高句麗の寺院跡に関する若干の考察」、発掘調査の成果を基に高句麗寺院の特徴を論じる千田剛道[1993]「高句麗寺院跡の発掘」、また専論ではないが高句麗の將軍塚と百済の遺跡も論じる斎藤忠[1981]「高句麗・百済の仏教文化に関する二・三の考察」等もみられる。

百済に関しては、先ず公州・扶余地域では斎藤忠[1978]「扶余軍守里廃寺跡に見られる伽藍とその源流」、北野耕平[1978]「百済時代寺院址の分布と立地」、文献史料と発掘調査報告を用い公州・扶余地域の百済寺址を紹介し、公州では石窟寺院が扶余では一塔一金堂の形式が主流であるとする安承周[1987]「百済寺址の研究」、扶余地方は大部分が平地伽藍であるが山麓傾斜面を利用しているとする廃寺址の報告の申光燮・洪性彬[1993]「扶蘇山廃寺跡の発掘」等がみられる。

百済の益山地域に関しては、黄寿永[1978]「百済帝積寺考」、それと関連するものとして崔孟植[1993]「王宮里廃寺(官宮寺)の発掘」があり、弥勒寺に関する洪思俊[1978]「百済弥勒寺考」、北野耕平[1988]「百済・弥勒寺の発掘調査」、張慶浩[1993]「弥勒寺跡の発掘」等があるが、韓国で弥勒寺に関する詳細な報告書(『弥勒寺研究』1991)がでており参照されたい。尚、百済全域に亘る伽藍の立地に関する亀田修一[1983]「百済寺院跡の伽藍と立地」がある。

尚、百済の石塔に関しては宋錫範[1986]「百済の石塔」がしられる。

新羅に関しては、四天王寺、芬皇寺和諍国碑(高仙寺碑)、その他新羅時代諸寺として若干あるのみであるが今西龍[1910]「慶州の地勢及び其遺跡遺物」、新羅の寺院の分布を金石文及び文献史料を用いて概観する岡野潮醇[1926]「新羅寺院の分布」、当時の寺名推定に疑問を投じる大坂金太郎[1931]「慶州に於ける新羅廃寺址の寺名推定に就て」があり、時代が下って慶州の遺跡、寺址、石塔等を紹介する山本智教[1978]「韓国古美術巡礼」がある。

皇竜寺に関しては、皇龍寺の性格を論じる李基白[1981]「皇龍寺とその創建」を押さえてから、発掘調査と史料から皇龍寺の歴史を論じる金東賢[1993]「皇龍寺の発掘」を読まれたい。

韓国の寺院建築の概論的論文としては、三国時代から李朝までの仏教建築を整理し、韓国の仏教建築史を論じながら韓国仏教史をも論じる申栄勳・黄義秀[1987]「韓国の仏教寺院建築」、韓国寺院内の個々の建築の用途を説明する法頂[1989]「寺院建築の仏教的意味と用途」等がみられる。

また、新羅石塔の専論としては杉山信三[1972]「朝鮮の仏教建築」、鄭永鎭[1981]「新羅石塔の発生と変遷」、宋錫範[1986]「新羅の石塔」等もみられる。

③ その他の仏教美術

蓮華紋に関しては、三国の蓮華紋様式の変遷を整理し各国の蓮華紋の独自性を論じる金和英[1968]「三国時代の蓮華紋の研究」(原文は韓国『歴史学報』34)があり、これによって新羅の各寺院が高句麗及び百済の、どの影響を受けているかを整理することができ、また新羅独自の蓮華紋の発生と形態を窺うことができる。高句麗古墳壁画の蓮華紋に注目したものとしては、大西修也[1982]「高句麗古墳壁画にみる雲文の系譜(上)」、上原和[1994]「高句麗絵画の日本へ及ぼした影響」等がみられる。

舍利具に関しては、金載元[1965]「感恩寺と西塔発見の舍利容器」、黄寿永[1974]「新羅皇龍寺九層木塔の舍利具」、未見ではあるが梅原末治[1950]「韓国慶州皇福寺塔発見の舍利容器」、姜友邦[1993]「韓国古代の舍利供養塔・地鎮具・鎮壇具」等があるとされ、その舍利容器の研究を契機に、韓国に於ける仏舍利信仰の起源とその推移を論じる二宮啓任[1967]「朝鮮の仏舍利について」、洪潤植[1981]「韓国の舍利信仰とその文化」等が発表され、姜仁求[1974]「百済の火葬墓」(原文は韓国・『考古美術』115, 1972年)、前稿の続編で百済の火葬墓の実例を挙げ蔵骨容器しかなく副葬品がないことから、この火葬墓が仏教の影響を受けていると論ずる[1977]「百済の墓制」(原文は韓国『美術資料』17)と拡大されていったものと思われる。

尚、僧侶の墓塔である石造浮屠に関しては鄭永鎬[1981]「韓国の石造浮屠(上)」, 同[1981]「韓国の石造浮屠(下)」がある。

以上、手元にある仏教美術に関する論稿のみを簡単に整理してみたが、これ以外に数多くの論稿があるものと思われる。本稿はただ参照のみにして頂きたい。

8. 日本研究のための研究

これまで紹介した論文の中にも日本研究のために行われたと思われるものも見られるが、本章では、特にタイトルや論文中の章項に日本関係の項目があるものを整理してみた。

(1) 著述

近年では、日本仏教史を論ずる場合、または日本古代史を論ずる場合でも、朝鮮三国を視野に入れるのが当たり前の如くなっているが、それは1970年頃にいち早くそのことを提唱した田村円澄の功績と思われる。確かに田村が言うように、境野黄洋[1931]『日本仏教史講話』、島地大等[1933]『日本仏教教学史』、山田文昭[1934]『日本仏教史之研究』、辻善之助[1944]『日本仏教史・上世篇』、西光義遵[1948]『日本仏教史概説』等、いずれも仏教伝来から本論の著述を始めているが、しかし、日本に仏教を伝えた百済等、朝鮮三国の仏教に対する言及はみられず、勿論、その他、日本古代史の著述にも朝鮮三国の仏教への言及はみられていない。田村は「『日本』仏教史である限り、日本の仏教のみを視角に収める方法は、間違いいはいえないが、しかし、一方では、仏教を東アジア世界の共通の宗教・思想・芸術・文化として考究する視点も必要であると思う」とし、更に「漢訳仏教圏の中に位置する朝鮮仏教は、独自の形態と存在理由をもっている。中国仏教の一部、ないしその亜流とみなすことはできない。しかも古代の日本仏教とのかかわりからすれば、中国仏教よりも朝鮮仏教のほうが、より緊密であった。飛鳥仏教の形成に直接関与し、かつ最も重要な役割を果

たしたのは、朝鮮仏教であった」として日本の古代仏教と朝鮮半島との係わりを論じた[1974]『西と東』、九州大学での三国仏教と日本仏教との交渉に関する講義の概要を収録した[1975]『飛鳥・白鳳仏教論』等を筆頭に、[1975]『新羅と飛鳥・白鳳の仏教文化』、[1978]『百済文化と飛鳥文化』、[1980]『古代朝鮮仏教と日本仏教』、[1981]『新羅と日本古代文化』、[1982]『日本仏教史1-飛鳥時代』、[1983]『半跏像の道』、[1983]『日本仏教史2-奈良・平安時代』、[1983]『日本仏教史4-百済・新羅』、[1985]『半跏思惟像の研究』、[1985]『古代朝鮮と日本仏教』、[1986]『仏教伝来と古代日本』、[1994]『飛鳥・白鳳仏教史-上』、[1994]『飛鳥・白鳳仏教史-下』等、概観しただけでも以上のような編著書があり、全てで日本仏教との関連の上で三国時代及び統一新羅仏教に言及しているのである。田村の編著書を一々評価するには任が重い。ただ朝鮮仏教研究の重要性を説く田村の功績に感謝するのみである。

田村以後、日本仏教史に関する著述の中に朝鮮三国の仏教を念頭に置くものが多く見られる。特に速水侑[1986]『日本仏教史-古代』はそれまでの研究成果を押さえた必読書であり、近年では古代日本と朝鮮三国の仏教交流、日本と中国の仏教交流、そして朝鮮仏教史を概観した中井真孝[1994]『朝鮮と日本の古代仏教』がある。

仏教美術の分野では、朝鮮三国からの渡来仏と韓国に現存する三国・統一新羅時代の仏像を概観し、広隆寺の弥勒菩薩像が渡来仏ではないかとし、また飛鳥時代と白鳳の初期の彫刻は、中国の東西魏及び南齊から南北朝末期頃の仏像様式が高句麗や百済にはいり、消化された仏像が主として百済を通じて日本に影響を及ぼし、その後の白鳳の彫刻は、当初は百済の影響を受け次に隋・唐の仏像様式の影響を受けつつ独自の様式を形成した新羅の影響を受けたとする久野健[1979]『古代朝鮮仏と飛鳥仏』、及び毛利久[1983]『仏教東漸-朝鮮と日本の古代彫刻』等がみられる。

資料集としては斉藤忠[1983]『古代朝鮮・日本金石文資料集成』が貴重である。

尚、日本に於ける三国・統一新羅仏教の影響を論じる場合の必携書として奈良時代における仏教典籍の伝来と奈良朝各宗の写経状況を整理した石

田茂作[1930]『写経より見たる奈良朝仏教の研究』を挙げたい。筆者も論稿もさることながら末尾の「奈良朝現在一切経疏目録」から多くの示唆を受けているものである。

(2) 日本と三国仏教

仏教伝来に関する早期の論稿として望月信亨[1937]「日本仏教初渡の年次に就て」があるが未見である。

百済に関しては、百済仏教の日本への影響を年代順に整理した趙明基[1973]「百済の仏教と日本」、飛鳥仏教に新羅や高句麗仏教の影響を認めながらも飛鳥仏教の基盤をあくまでも百済仏教とする速水侑[1185]「百済仏教と飛鳥仏教」等がある。

百済だけではなく高句麗・新羅、または中国まで視野に入れた論稿としては、東アジアの国際情勢の中で中国からの朝鮮半島への仏教伝来当時の社会的背景を踏まえ、日本の仏教公伝の意義を論ずる中井真孝[1979]「仏教の伝来と朝鮮三国」、百済仏教と日本仏教の関係を仏教初伝の受容期を中心に論じ、次に日本仏教への新羅仏教の影響を新羅の花郎、弥勒信仰及び元暁等から論じる田村円澄[1979]「日本仏教と朝鮮」、及び[1987]「古代の韓国仏教と日本の仏教」、そして1989年までの多くの研究成果を踏まえインドから中国への仏教伝来、高句麗、百済、そして新羅の仏教受容に関する史料及び発掘調査報告書等を整理し、次に日本の仏教の受容の問題点を論ずる園田香融[1989]「東アジアにおける仏教の伝来と受容」、朝鮮三国の仏教初伝と日本のそれとの比較から、日本仏教伝来時の問題と伝来の意味を論じる井上秀雄[1990]「日本と朝鮮の仏教伝来」、井上には同様に朝鮮三国と日本の仏教受容期を比較し、仏教公伝の意味を論じ、また受容期における三国と日本の仏教の受容態度の差を論じる[1996]「文化史からみた仏教公伝の諸様相」等もある。

仏教の受容を渡来氏族との関係から論じたものとしては、鞍部氏と百済仏教の関係を探る直林不退[1994]「渡来系氏族仏教の一考察」に先行研究の紹介があり参照されたい。尚、直林が言及していない論稿として、渡来各氏族の仏教受容を整理し、百済王氏とその氏寺の特質を整理し6世紀から

8世紀に亘る日本における仏教受容形態を論じる岡本敏行[1981]「渡来氏族と仏教」等もある。

聖徳太子と朝鮮三国に関しては早期のものでは、聖徳太子の三経義疏の三経解釈の源流を中国と朝鮮三国に探る富貴原章信[1939]「聖徳太子仏教の源流について」、その続編の[1940]「攝論宗の日本伝来に就て」があり、聖徳太子までの中国と朝鮮三国の仏教思想の流れが詳細に整理されており益するところが多い。また聖徳太子と朝鮮三国との関係を論じた田村円澄の論著により、近年では聖徳太子に関するもので朝鮮三国を視野に入れたものは多く、その数を把握することは困難である。ただ百済との国交から新羅の「和白」及び花郎集団のある程度出自に拘らない人物登用制が太子の知るところとなり、それが「憲法十七条」に反映されたのではないかとしてみた拙稿[1995]「聖徳太子と朝鮮三国」のみを紹介することを許されたい。

(3) 日本と新羅仏教

日本に於ける新羅仏教の影響に関しては、新羅と中国との交通と、新羅の仏教受容を述べ、次に日本への渡来僧を整理し新羅仏教の影響は668年を境に変化するもので、特に新羅留学僧の帰国からであるとする平野邦雄[1961]「古新羅の対外交渉に関する覚書」、新羅諸師の浄土教研究を整理し、新羅浄土教の日本仏教への影響を論じる恵谷隆戒[1973]「新羅仏教と日本仏教との交流」、目録類と僧伝から新羅僧の活躍を論じ、次に大安寺審祥を中心に新羅留学僧の活躍と、そして日本に於ける新羅華嚴の影響を論じた堀池春雄[1985]「新羅仏教とわが天平仏教」等があり、関連論稿としては、新羅送使から623年から690年頃までの日本と新羅の関係を考察し、後の白鳳時代が新羅学問僧の時代、つまり新羅留学の経験をもつ学問僧が日本の仏教界の指導者となり、日本の仏教は新羅仏教の影響を強く受けるようになるのであるが、その前段階として新羅送使がその準備の役割を担ったとする田村円澄[1979]「新羅送使考」等がある。

新羅留学僧ではなく入唐求法僧であるが、在唐中に新羅仏教の影響を受けたと考えられる円仁に関しては、早くは今西竜[1933]「慈覚大師入唐求

法巡礼行記を読み、近年では堀敏一[1998]「唐代新羅人居留地と日本僧円仁入唐の由来」があり、関連論稿として岩佐貫三[1967]「シナ司命思想の日本的受容」、未見ではあるが斉藤円真[1984]「赤山明神に関する一考察」等があるとされる。

国家との関連から論じたものとしては、受戒と国家の関係から仏教と国家との関係における日本の特殊性を論じようとした坂上早魚[1991]「日本・唐・新羅における受戒制度について」、日本の七世紀後半の仏教が律令国家形成と不可分の史的特質を持っていたということを中国と三国との係わりから論じた上川通夫[1994]「律令国家形成期の仏教」、国家と仏教の係わりというよりは朝鮮半島では王との、日本では天皇との係わりを中心に論じている感のある石井公成[1996]「仏教受容期の国家と仏教」等がみられる。

また、日本に存する四つの新羅鐘と高麗鐘のそれぞれの鐘記を、諸氏の釈文を紹介しつつ整理した藤田亮策[1955]「在日本新羅鐘の銘文」は新羅史研究の史料として重要であり、その他に正木晃[1989]「日韓の仏教受容とその展開」、浜田耕作[1995]「留唐学僧戒融の日本帰国をめぐる渤海と新羅」、雲井昭善[1995]「弥勒信仰にみる韓・日の比較」等もそれ等の研究分野の重要性を再確認させるものである。

(4) 日本と新羅僧

元暁と義湘の絵巻物である「華嚴宗祖師絵伝」に関しては、早くは八百谷孝保[1938]「華嚴縁起絵詞とその錯簡に就いて」、また梅津次郎[1948]「義湘・元暁繪の成立」、川口久雄[1959]「華嚴縁起の説話」等がみられ、近年では金沢弘[1990]「華嚴宗祖師絵伝」成立の背景と画風」、竹内順一[1990]「華嚴宗祖師絵伝」詞書の書風について」、そして遊心安楽道の日本撰述説の一環として「元暁繪」の中の智拳印に注目した愛宕邦康[1996]「華嚴宗祖師絵伝」元暁繪の制作意図に関する一試論」がある。この分野で問題となるのは明恵の義湘観及び元暁観と関連する「華嚴宗祖師絵伝」の成立の背景と制作意図であるが、現段階では「元暁繪」に関しては愛宕の論稿に説得力を感じる。

尚、関連論稿として、明恵の夢を分析し明恵の元暁と義湘に対する態度を論じ、断定はしていないが明恵は義湘よりも元暁に傾倒していたとするような論調の河合隼雄[1979]「明恵上人の夢について」、明恵の著述を整理し明恵教学の中の新羅・高麗仏教の影響を論じ、特に元暁の影響が強いとする柴崎照和[1996]「明恵と新羅・高麗仏教」がある。また蛇足ではあるが韓国での出版の金知見監修・金京南訳[1996]『華嚴縁起—華嚴宗祖師繪傳』「華嚴宗祖師繪伝」(韓国：法融寺)の先行研究が整理されており有益である。参照されたい。

元暁と行基に関しては、行基と行基を罰する側の政府も民衆仏教者としての元暁を知っていたとし、行基は元暁に励まされた形で民衆仏教運動を押し進めたとする田村円澄[1975]「行基と新羅仏教」及び[1980]「行基と新羅仏教」、行基の活動形態と三階教との類似点を指摘し、次に元暁と行基の事跡を比較して元暁と行基は対立的な存在であるとする吉田靖雄[1981]「行基における三階教および元暁との関係の考察」がある。

尚、拙稿[1992]「『日本靈異記』にみられる朝鮮半島観」は説話文学からの朝鮮仏教研究の可能性を模索したものであるが、その中で景戒が新羅僧に関して一度も言及していないにもかかわらず元暁の『涅槃宗要』の一節を引用していることを指摘してみた。参照されたい。

新羅から多くの典籍をもたらした審祥に関しては、将来目録を整理し審祥がかなり正確に元暁教学を継承している、その元暁教学が審祥を通じて良弁等日本の諸師に大きな影響を与えたとする平岡定海[1972]「新羅の審祥の教学について」、審祥の事跡を通して審祥と新羅との関係、審祥の法脈を探り、審祥の華嚴經の講義が智儼・法蔵の著述ではなく義湘・元暁の著述を利用したのではないかとする堀池春峰[1973]「華嚴經講説よりみた良弁と審祥」がある。尚、堀池の論稿の末尾に附されている「大安寺審祥師經録」は実に有益である。

その他に、奈良朝の写経関係文書から新羅の浄土教典籍の将来を整理し、新羅浄土教典籍を引用する智光・智憬・良源・源信の著述と、そして同じく多くの引用がみられる『安養集』と『安養抄』から叡山浄土教中の新羅浄土教の影響を探る佐藤哲英[1979]「朝鮮浄土教の叡山浄土教に及ぼせる

影響」，若干趣向は異なるが『続日本紀』にみられる僧隆観が『日本書紀』及び『懷風藻』にみられる新羅沙門行心ではないかとする関晃[1954]「新羅沙門行心」等もある。

(5) 日本と三国・統一新羅の仏教美術

① 仏像

日本が百済から学んだ仏教は中国南朝系の仏教であるとは定説になっている観があるが，仏教美術からの研究では，先ず早くは止利作の法隆寺釈迦三尊と龍門賓陽洞本尊像との様式の類似を指摘した平子鐸嶺[1907]「司馬鞍首止利仏師」に端を発し，龍門様式や東魏様式が高句麗に伝わり，それが百済をへて日本に伝わったとする水野清一[1949]「飛鳥白鳳仏の系譜」，松原三郎[1971]「飛鳥白鳳仏源流考(一)・(二)」，百済や新羅出土の仏像で飛鳥時代の主流を占めていた北朝系の仏像ないし止利派の仏像の手本となったものはみられないとし，北魏系から発展した三国時代像と考える関山神社菩薩立像と高田市医王寺伝薬師如来像を論じる久野健[1965]「二つの古代銅像」，龍門様式や東魏様式が直接百済に伝わったとする毛利久[1978]「三国彫刻と飛鳥彫刻」等，止利様式が北朝起源であるとの説が定説ようになっていた。尚，毛利久には[1981]「飛鳥・白鳳の童形仏とその源流」及び[1983]「日韓古代美術雑考」等もあるが，また韓国での新たな仏像の発見から百済仏の飛鳥仏の源流がみられるとし，中国での新たな仏像の発見から南朝の影響が百済に及んでいたとする久野健[1982]「百済仏の服制とその源流(上)」，しかしながら百済物にみられる偏衫着用 の仏像形式は北魏に始まったものが梁に影響を及ぼし，それが百済に影響を及ぼしたとする同[1983]「百済仏の服制とその源流(下)」もある。それ等に対し吉村怜が止利様式の起源が南朝の梁様式であるとする[1983]「止利式仏像の源流」，[1987]「飛鳥様式南朝起源論」を発表後，法隆寺釈迦三尊像に関して北魏様式なるが故に梁様式の流れを汲むとする大西修也[1990]「釈迦三尊像の源流」の論稿もあるが，従来の北朝起源説を擁護する田辺三郎助[1985]「飛鳥仏と南北朝の仏像」，町田甲一[1987]「南北朝仏像様式史論批判」等の論稿が発表され，それ等に対して北朝起源論の矛盾

を指摘しつつ，梁・百済様式が日本の早期仏像に及ぼした影響を論じたのが吉村怜[1992]「日本早期仏教像における梁・百済様式の影響」並びに[1996]「仏教美術の東アジアへの伝播」である。特に最後の吉村の論稿はそれまでの研究を網羅しており筆者も参照させていただいている。一読されたい。

② 半跏像

半跏像に関しては広隆寺の宝冠弥勒像と韓国・国立中央博物館の金銅半跏思惟像との相似から多くの論稿が発表されている。田村円澄には[1981]「二つの半跏像」以外に既に紹介したように田村円澄著『日本仏教史4—百済・新羅』中の四篇の論稿，及び[1985]「半跏思惟像の諸問題」等がある。その他に広隆寺宝冠弥勒に関して文献的考察と様式的考察を行い，宝冠弥勒を推古30年に新羅よりもたらされて広隆寺に安置されたものとする岩崎和子[1985]「広隆寺宝冠弥勒に関する二，三の考察」，渡来の半跏像や七世紀前半から日本で制作されたと考えられる菩薩半跏像，白鳳時代からの菩薩半跏像を概観し，八世紀からの半跏思惟像は如意輪観音或いは救世観音と呼ばれているとする久野健[1985]「飛鳥・白鳳・天平時代の半跏像」，新羅半跏像をすべて北朝系とするのは早計であるとし，百済半跏像の系譜を対馬で確認された半跏像等を持ちいて考察した大西修也[1985]「百済半跏像の系譜について」，三国時代や中国南北朝時代の造像銘を中心に，阿弥陀・弥勒信仰の実態と図像との関係を述べ，日本に関しては藤原道長の阿弥陀・弥勒信仰に言及する[1986]「阿弥陀・弥勒信仰の実態と図像」，対馬の半跏像に関する[1984]「対馬と渡来仏」，同じく[1985]「対馬浄林寺の銅造半跏像について」等がある。

尚，半跏像ではないが対馬に存する金銅仏の形式とその伝来に関しては八尋和泉[1984]「対馬黒瀬の新羅金銅仏」があり，また未見ではあるが菊竹淳一[1973]「対馬の朝鮮系仏像彫刻」もあるとされる。

③ 伽藍

伽藍に関しては，早くは百済寺院跡し日本の飛鳥・白鳳時代の寺院跡を比較した石田茂作[1953]「百済寺院し法隆寺」，日韓の伽藍配置の比較検

討を行い、双塔伽藍の形式は統一新羅と白鳳から奈良時代に見いだされた現象であり、そこに鎮護国家三部経の一たる法華経の思想が反映されているとする坂詰秀一[1980]「日韓古代寺院の伽藍配置」があるが、個人的には後者に興味がそそられる。

尚、法隆寺に関する近年の論稿としては、未見であるが上原和[1991]「朝鮮・中国の遺物から見た法隆寺金堂建築の様式年代(上)(中)(下)」及び李成市[1994]「法隆寺金堂阿弥陀如来坐像台座から発見された人物画像の出自をめぐって」等があるとされる。

④ 古瓦・文様

古瓦に関しては、新羅の古瓦の源流を百済と高句麗に探り、次に新羅での様式の時期区分を日本と比較して、日本に於ける新羅瓦の影響を論じた稲垣晋也[1981]「新羅の古瓦と飛鳥・白鳳時代古瓦の新羅的要素」、瓦の様式から飛鳥・白鳳時代寺院の百済・新羅の影響を論ずる同[1982]「飛鳥・白鳳時代の造寺活動と百済・新羅の影響」があり、未見ではあるが谷豊信[1992]「仏教伝来と蓮華紋瓦当」等があるとされ、また文様に関しては、勸修寺繡帳の中の文様中、飛仙と杏葉唐草の文様が高句麗の壁画文様に見られることから、それは当時帰化した高句麗人の技工によって伝えられた図様ではないかとし、飛仙の図様から、中国と高句麗と日本の関係に示唆を与える小泉顕夫[1959]「勸修寺繡帳と高句麗の壁画文様」等もある。

⑤ その他

その他としては、伽藍構造と仏画と、そして日韓の土着信仰から両国の仏教受容の特質を論じようとする柳東植[1977]「土着信仰と宗教受容」も示唆に富んでいるが、韓国寺院の建造物の構成と韓国仏教の歴史を概観し、日本仏教との比較から韓国仏教の性格を会通総合的であると、韓国仏教の性格を明らかにすることは日本仏教の性格をより明らかにする上で、きわめて重要な視点であるとする前田恵学[1976]「韓国仏教の特質」は是非一読されたい論文であり、また仏教儀礼の日韓の共通性を論じる洪潤植[1984]「東大寺の「お水取り」をめぐって」も新たな研究領域を示唆する

論稿である。

9. その他の研究

以上までの項目に入れることができなかった若干数の論稿をここで紹介することとする。

新羅の密教に関してであるが、韓国側では最近、密教に関する論稿が多く見られるが、日本では『三国遺事』等の史料と仏像様式の考察から新羅密教史を整理した正木晃[1987]「新羅密教研究」、『三国遺事』の密教関係の記事から新羅雑密の性格を整理し、郷歌の思想背景に雑密思想があることを論じる李妍淑[1998]「新羅初期雑密思想攷」、及び既に紹介しているが新羅の仏像様式の様式変遷過程に密教思想の存在を指摘する朴亨国の論稿があるにすぎない。全て詳細な研究であるが、まずは新羅の密教全般にわたって論じている正木の論稿から読まれることを勧めたい。

三国・統一新羅時代の仏教を論ずるとき、統一新羅と併存した渤海の存在も念頭に置く必要があろう。渤海に関する研究は考古・史学から筆者が知るだけで著述20以上、論文は100以上もが発表されている。しかし、仏教に限って言えば二仏並座像に集中しており駒井和愛の[1946]「渤海の二仏並座石像」、[1950]「渤海の仏像」、[1956]「渤海文化史上の問題二つ」等の論稿、そして三上次男[1968]「半拉城出土の二仏並座像とその歴史的意義」、川上洋[1992]「渤海の東京と二仏座像」等があり、また近年では渤海の仏教遺跡について、その分布状況、仏殿と塔の形式、仏像と遺物等を紹介し、二仏並座像と寺院形式から渤海の仏教が高句麗の仏教様相を反映したものではないかとする徐光輝[1997]「渤海の仏教遺跡について」があるだけである。また寺院跡に関しては、渤海国の文化は特有のものをもってはいたが、そこには唐文化の影響が多くみられると同時に、一方では古瓦文様のように、高句麗文化の伝統を踏襲しているのが特色であるとして仏教遺跡を紹介する江谷寛[1966]「沿海州における仏教遺跡」等もみられるが、史料制限もあり、未だ渤海仏教の全容は明らかになっていないのが

実状である。

次に大乘起信論の担当者と重複する恐れがあるが、『釈摩訶衍論』に関しては、『釈摩訶衍論』の新羅成立説を説いたのが石井公成[1988]「『釈摩訶衍論』の成立事情」であり、それに異論を唱える遠藤純一郎[1996]「『釈摩訶衍論』新羅成立説に関する考察」がある。

その他に、新羅梵鐘鐘頂部の円筒が『三国遺事』の萬波息笛説話に思想的根拠をおくものであると論じる黄寿永[1987]「新羅の梵鐘と萬波息笛の説話」、新羅時代に刊行された小形木版卷経と、それが収められていた舍利具を紹介する千恵鳳[1984]「現存する世界最古の木版本」等もある。

10. おわりに

以上、三国時代・統一新羅時代の仏教に関する論稿を紹介してみた。実に多くの論稿があるが未見のものがあまりにも多く、自分の浅学に恥じ入る思いで一杯である。論稿を整理しつつも頭に浮かんだのが元暁の「四宗・五教を以て宗旨・仏意を論じることは螺で海水を酌み、管で天をうかがうようなものである」という一節である。正しくそのような企てであり、またそのような紹介しかできなかった感がある。ここに紹介したものが日本での全ての成果ではないということは言うまでもないことであり、最初の思いに反し不十分な紹介に終わったことを深くお詫びするのみである。

<参考文献>

戦前の日本に於ける朝鮮仏教論文目録

1907

平子鐸嶺 司馬鞍首止利仏師『史学雑誌』18-6

1908

脇谷搦謙 新羅の元暁法師は果たして至相大師の弟子なりしや『六條学報』83

1910

脇谷搦謙 支那に学びし韓国の僧『六條学報』100

1911

今西龍 新羅旧都慶州の地勢及び其遺蹟遺物 『東洋学報』1-1

見山望洋 新羅の名僧暁・湘二師 『新仏教』12-6

小野玄妙 元暁の金剛三昧経論 『新仏教』11-6

青柳南冥 『朝鮮宗教史』朝鮮研究会(1992年, 韓国・国学刊行会復刊)

1912

今西龍 新羅僧道説に就て 『東洋学報』2-2

1913

妻木直良 新羅の高僧円測法師 『大崎学報』31

1915

今津洪嶽 元暁大徳の事跡及び華嚴教義一華嚴経疏の発見一 『宗教界』11-11 宗教界雑誌社

1920

小田幹治郎 新羅名僧元暁の碑 『朝鮮彙報』大正9年4月号

岡井慎吾 新羅名僧元暁の碑を読んで『朝鮮彙報』大正9年6月号

1921

橋川正 空也一暁の踊り念仏について『仏教研究』(大谷大学大谷学会)4-2-1

1923

管野銀八 新羅興寧寺澄暁大師塔碑の撰者に就いて 『東洋学報』13-2

1926

岡野潮醇 新羅寺院の分布 『大崎学報』69

1928

源豊宗 朝鮮の仏像彫刻 『思想』81

1929

小倉進平 新羅郷歌と吏説の研究 『京城帝国大学文学部紀要』1

1930

忽滑谷快天 元暁の著述と思想 『朝鮮禅教史』(名著刊行会, 1969年復刊)

石田茂作 『写経より見たる奈良朝仏教の研究』東洋文庫

末次明信 新羅時代の浄土教に就いて 『浄土学』1

1931

- 葛城末治 新羅誓幢和尚塔碑について 『青丘学叢』 5
 大坂金太郎 新羅廃寺址の寺名推定について 『朝鮮』 197
 末松保和 高麗文献小録(一)―三国史記 『青丘学叢』 6

1932

- 末松保和 新羅仏教伝来伝説 『朝鮮』 206
 末松保和 高麗文献小録(二)―三国遺事 『青丘学叢』 8
 都甲玄卿 仏法の新羅流伝と其の採用説 『朝鮮』 211-213
 末松保和 甘山寺弥勒尊像及び阿弥陀仏の火光後記 『朝鮮』 211

1933

- 今西龍 慈覚大師入唐求法巡礼行記を讀みて 『新羅史研究』 近沢書店

1934

- 江田俊雄 新羅の道倫と「倫記」所引の唐代諸家 『宗教研究』 11-3
 末松保和 新羅昌林寺無垢浄塔願記について 『青丘学叢』 15

1935

- 多田正和 仏教の東漸と新羅仏教 『日本精神研究』 8
 江田俊雄 新羅に於ける仏教の受容に就いて 『朝鮮』 242
 江田俊雄 新羅の仏教受容に関する諸問題 『文化』 2-8
 江田俊雄 朝鮮仏教と護国思想
 一特に新羅時代のそれに就いて一 『朝鮮』 239
 葛城末治 『朝鮮金石巧』 韓国・亜細亜文化社, 1979年復刊

1936

- 池内宏 新羅の花郎について 『東洋学報』 24-1

1937

- 八百谷孝保 新羅社会と浄土教 『史潮』 7-4
 望月信亨 日本仏教初渡の年時に就いて 『浄土学』 11

1938

- 石崎達二 新羅明神について 『史蹟と古美術』 15-2
 小泉顕夫 泥仏出土地元五里廃寺跡の調査 『昭和十二年度古蹟調査

報告』 朝鮮古蹟研究会

- 八百谷孝保 華嚴縁起絵詞とその錯簡に就いて 『畫説』 16 東京美術研究所

1939

- 富貴原章信 聖徳太子仏教の源流に就いて 『性相』 8
 江田俊雄 新羅仏教に於ける浄土教 『支那仏教史学』 3-3・4合号
 横超慧日 支那浄土教における三乘観 『支那仏教史学』 3-3・4合号

1940

- 富貴原章信 撰論の日本伝来に就て 『大谷学報』 21-2
 横超慧日 元暁の二障義について 『東方学報』 11-1 東方文化学院

1941

- 江口鑿次 新羅の建てた四天王寺 『四天王寺』 7-7
 横超慧日 戒壇について 『支那仏教史学』 5-2
 金炳奎 朝鮮仏教に於ける宗派の沿革 『東洋大学論叢』

1942

- 望月信亨 義湘・元暁・義寂等の浄土論並びに十念説 『中国浄土教理史』 法蔵館
 高峯了州 元暁及び義湘とその門流 『華嚴思想史』 百華苑

1943

- 花山信勝 聖徳太子と大「和」国家の建設 『日本仏教史学』 2-3
 江田俊雄 朝鮮仏教の特色―特に其の朝代的表現 『宗教研究』 第五年第一輯第二五号
 三品彰英 朝鮮古代研究第一部―新羅花郎の研究(三品彰英論文集第6卷『新羅花郎の研究』, 平凡社, 1974年 所収)

1944

- 江田俊雄 朝鮮民族の興亡と朝鮮仏教の隆替 『仏教研究』 第七卷第四号,

戦後の日本における朝鮮仏教論文目録

1946

- 望月信亨 新羅義寂の著書並に無量寿経疏『浄土学』21
駒井和愛 渤海の二仏並座石像『学海』3-4

1947

- 斎藤忠 『朝鮮仏教美術考』 宝雲舎

1948

- 梅津次郎 義湘・元曉繪の成立『美術研究』149

1949

- 水野清一 飛鳥白鳳仏の系譜『仏教芸術』4

1950

- 梅原末治 韓国慶州皇福寺塔発見の舍利容器『美術研究』156
駒井和愛 渤海の仏像一特に二仏並座石像について『遼陽発見の漢代の墳墓』東京大学文学部考古学研究室

1952

- 杉山信三 新羅石灯一形式の造立年代について『日本建築学会研究報告』20

- 八百谷孝保 新羅僧元曉伝放(附元曉著作目録)『学報』38 (大正大)

1953

- 山崎宏 隋の高句麗遠征と仏教『史潮』49
石田茂作 百濟寺院と法隆寺『朝鮮学報』5

1954

- 関晃 新羅沙門行心『続日本紀研究』1-9
三品彰英 朝鮮における仏教と民族信仰一仏教の受容形態その1『仏教史学』4-1
末松保和 新羅仏教伝来伝説考『新羅史の諸問題』東洋文庫4

1955

- 中吉功 朝鮮三国時代の金銅仏『MUSEUM』56
藤田亮策 在日本新羅鐘の銘文一青丘遺文(二)『大和文化研究』3-3・4

- 李弘植 貞元廿年在銘新羅梵鐘一襄陽雪山山出土品『朝鮮学報』7

- 水野弘元 菩提達磨の二入四行説と金剛三昧経『駒沢大学研究紀要』通巻十号

- 水野弘元 菩提達磨の二入四行説と金剛三昧経『印仏研』6

1956

- 牧田諦亮 朝鮮一戦後仏教史学の回顧と展望『仏教史学』5-3・4合号
藤田亮策 朝鮮三国時代の仏教美術『MUSEUM』68
中吉功 新羅甘山寺石造弥勒・阿弥陀像について『朝鮮学報』9
坂本幸男 元曉の四教論『華嚴教学の研究』平楽寺書店
榎本杜人 朝鮮の仏教美術一阿弥陀像造立の問題によせて『MUSEUM』671

1957

- 江田俊雄 新羅の慈蔵と五台山『文化』21-5
朝鮮の仏教『親和』48
榎本杜人 新羅の阿弥陀像について『MUSEUM』77

1958

- 小泉顯夫 高句麗清岩里麁寺址の調査 『仏教芸術』33
中吉功 造像銘のある新羅の鉄仏二種『朝鮮学報』12
江田俊雄 新羅慈蔵による文殊感得の布教法『宗教研究』154

1959

- 小泉顯夫 勸修寺繡帳と高句麗の壁画文様『朝鮮学報』14
恵谷隆戒 新羅浄土教についての二、三の問題『仏教史学』7-4
川口久雄 華嚴縁起の説話『日本絵巻物全集』7角川書店

1960

- 金東旭 新羅浄土思想の展開と願往生歌〔三品彰英他抄訳〕『朝鮮研究年報』2号
村地哲明 遊心安楽道元曉作説への疑問『大谷学報』39-4

1961

- 平野邦雄 古新羅の対外交渉に関する覚書一わが仏教受容の問題と関連して『研究報告』9 (九州工業大学人文社会科学)

- 三品彰英 新羅の浄土教—「三国遺事」所載浄土教関係記事註解『塚本博士頌壽記念 仏教史学論集』(同記念会)
- 本井信雄 新羅元暁の伝記について『大谷学報』41-1
- 山本智教 古新羅時代の尊像『密教文化』57
- 恵谷隆成 無量寿経疏上下二卷新羅法位撰『仏教大学研究紀要』40
- 本井信雄 新羅元暁の伝記について『大谷学報』41-1
- 1962
- 山本智教 新羅統一時代の仏教彫像『密教文化』61
- 1963
- 中吉功 新羅彫刻覚書『朝鮮学報』29
- 金思煒 元暁大師と願往生歌『朝鮮学報』27
- 1964
- 梅原末治 韓三国鼎立時代の金銅の沓と冠帽『美術史』53
- 1965
- 久野健 二つの古代銅像—朝鮮三国仏と白鳳仏『史迹と美術』359 岩佐貫三 シナ司命思想の日本的受容『東洋学研究』1
- 金載元 感恩寺と西塔発見の舍利容器『みずゑ』720
- 山田行雄 曇鸞教学と元暁の浄土教思想-特に行論を中心として-『龍谷大学仏教文化研究所紀要』4
- 山田行雄 遊心安楽道の浄土教思想『宗學院論集』復刊第三七号
- 井上光貞 日本における仏教統制機関の確立過程『日本古代国家の研究』岩波書店
- 駒井和愛 渤海文化史上の問題二つ『石田博士頌壽記念東洋史論叢』
- 1966
- 江谷寛 北方古代学界の展望(15):沿海州における仏教遺跡—渤海時代のアブリコンボ寺院『古代学』13-2
- 中吉功 新羅小金銅仏—特に観音・勢至両菩薩像について『朝鮮学報』37・38
- 松林弘之 新羅浄土教の一考察—元暁の浄土教思想をめぐって『印仏研』15-1

- 松林弘之 朝鮮浄土教に於ける憬興・義寂の一考察『仏教学研究』22
- 末松保和 旧三国史と三国史記『朝鮮学報』39・40
- 1967
- 賀幡亮俊 環興の無量寿経疏について『印仏研』16-1
- 松林弘之 朝鮮浄土教の研究—弥勒所問の十念をめぐる疑問—『龍谷大学仏教文化研究所紀要』6
- 松林弘之 朝鮮浄土教における十念説の展開『印仏研』16-1
- 岸覚勇 元暁浄土教と善導教学の比較『統統善導教学の研究』記主 禅師鑽仰会
- 二宮啓任 朝鮮の仏舍利について『朝鮮学報』45
- 松原三郎 新羅石仏の系譜『美術研究』251号
- 1968
- 松林弘之 朝鮮三国鼎立時代の仏教『仏教史学』14-1
- 松林弘之 朝鮮浄土教の研究—弥陀と弥勒の浄土観を中心として『龍谷大学仏教文化研究所紀要』7
- 金和英 [安井良三抄訳] 三国時代の蓮華文の研究『朝鮮研究年報』10
- 三上次男 半拉城出土の二仏并座像とその歴史的意義—高句麗と渤海を結ぶもの『朝鮮学報』49
- 1969
- 蔡印幻 新羅に於ける菩薩戒観について『印仏研』18-1
- 蔡印幻 元暁判比量論の研究『日本仏教』29
- 富貴原章信 元暁判比量論の研究『日本仏教』29 日本仏教研究会
- 柏木弘雄 起信論註釈書の系譜『印仏研』17-2
- 1971
- 中井真孝 新羅における仏教統制機関について—特にその初期に関して—『朝鮮学報』59 (後に中井真孝著『日本古代佛教制度史の研究』法蔵館1991年に所収)
- 蔡沢珠 新羅の戒律思想について『仏教学年報』5
- 蔡澤洙 韓国仏教の伝統的学習教育課程について『印仏研』19-2
- 金雲学 新羅仏教の特殊性—特に護国仏教について—『仏教学年報』5

- 石橋真誠 元暁の華嚴思想『印仏研』19-2
 松原三郎 飛鳥白鳳仏源流考(一)『國華』931
 松原三郎 飛鳥白鳳仏源流考(二)『國華』932
 中吉功 『新羅・高麗の仏像』二玄社
- 1972
 李箕永 新羅仏教の性格とその現代的意義『韓』1-3
 大西修也 成都万仏寺の開基と新羅僧無相について『美術史研究』
 (早稲田大)9
 松原三郎 新羅仏における唐様式を受容—二つの問題について
 『仏教芸術』83
 黄寿永 韓国三国時代の彫刻『仏教芸術』83
 金彊模 花郎思想研究『仏教学研究会年報』6
 平岡定海 新羅の審祥の教学について『印仏研』40
 金正基 韓国の寺院遺跡について『仏教芸術』83
 杉山信三 朝鮮の仏教建築—特に石塔形式の展開について
 『仏教芸術』83
- 1973
 堀池春峰 華嚴経講説よりみた良弁と審祥『南都仏教』31
 末尾「大安寺審祥師経疏録」
 恵谷隆戒 新羅仏教と日本仏教との交流『アジア公論』2-9
 村上四男 仏教の朝鮮三国への伝来と新羅真興王代
 『アジア文化』9-4
 黄寿永 [藤沢房子訳] 新羅聖住寺即百済烏合寺とその碑石について
 『アジア文化』(東洋哲学研)10-2
 田村圓澄 三つの烏合寺—百済と河内『アジア文化』9-4
 黄寿永 新羅皇龍寺九層塔誌—『皇龍寺刹柱本記』に対して
 『アジア文化』(東洋哲学研)9-3
 菊竹淳一 対馬の朝鮮系仏像彫刻『日本のなかの朝鮮文化』18
 金知見・蔡印幻編『新羅仏教研究』山喜房仏書林以下所収納論文
 山口瑞鳳 チベット仏教と新羅金和尚『新羅仏教研究』

- 金彊模 新羅元暁の文学観『新羅仏教研究』
 崔凡述 元暁大師『般若心経復元疏』『新羅仏教研究』
 蔡澤洙 新羅大賢と『古迹記』について『新羅仏教研究』
 春日禮智 新羅の義寂とその『無量寿経述義記』『新羅仏教研究』
 源弘之 新羅浄土教の特色『新羅仏教研究』
 趙愛姫 新羅における弥勒信仰の研究『新羅仏教研究』
 趙明基 百済の仏教と日本『アジア公論』2-9
 中吉功 『海東の仏教』国書刊行会
- 1974
 二宮啓任 書評：金知見・蔡印幻編『新羅仏教研究』『朝鮮学報』73
 黄寿永 新羅皇龍寺九層木塔の舍利具『仏教芸術』99
 黄寿永 新羅皇龍寺九層木塔の刹柱本記『仏教芸術』98
 趙愛姫 上代新羅の弥勒浄土信仰について『印仏研』44 (22-2)
 恵谷隆戒 新羅元暁の遊心安楽道は偽作か『印仏研』23-1
 関口真大 韓国仏教の特色『印仏研』23-1
 笠井倭人 三国遺事注解—仏教伝来編(上)『紀要』(京都女子学園・
 仏教文化研)4
 田村円澄 『西と東』永田文昌堂
- 1975
 田村円澄 行基と新羅仏教『日本のなかの朝鮮文化』26
 『飛鳥・白鳳仏教論』雄山閣出版
 田村円澄・洪淳昶 『新羅と飛鳥・白鳳の仏教文化』吉川弘文館
 高崎直道 元暁の『涅槃宗要』について『大正蔵経会通信』第七五
 李弘植 羅末の戦乱と緇軍 『韓』4-4韓国研究院
- 1976
 アジア仏教史『中国編V—東アジア諸地域の仏教』佼成出版
 志水正司 百済仏教の点描『史学』47-3(慶応大・三田史学会)
 田村円澄 百済系仏教と新羅系仏教歴史公論7
 爪生津隆雄 憬興師所覽の大経と親鸞聖人『宗学院論輯』10
 恵谷隆戒 韓国浄土教の特性『印仏研』24-2

新羅元暁の浄土教思想『浄土教の新研究』山喜房仏書林

木村宣彰 元暁の教学と唯識説『宗教研究』226

鄭学権 元暁大師の十念義について『印仏研』25-1

村上四男 新羅真興王と其の時代『朝鮮学報』81

前田恵学 韓国仏教の特質—日本仏教のそれとの対比において『愛知学院大学論叢文学部紀要』6

大西修也 百済の石仏坐像—益山郡蓮洞里石造如来像をめぐって—
『仏教芸術』107

洪潤植 『韓国仏教儀礼の研究』流文館

1977

新川登亀男 高句麗の仏教受容『研究紀要』(人文・社会B)〈大分大・教育〉5-2

松原三郎 三国時代初期の金銅仏について—とくに百済の造像を中心として『古美術』52

姜仁求 [松井忠春訳] 百済の火葬墓『古代文化』29-11

蔡澤洙 新羅における中国仏教の受容形態『東洋文化研究所紀要』71

蔡印幻 新羅における占察懺悔法の実践『仏教の実践原理』

木村宣彰 元暁の涅槃宗要—特に浄影寺慧遠との関連『仏教学セミナー』26大谷大学仏教学会

木村宣彰 元暁の涅槃経観『宗教研究』234

李永子 元暁の止観『仏教の実践原理』

井上秀雄 朝鮮における仏教受容と神観念『研究報告』〈東北大・日本文化研〉13

村松法文 韓国仏教史蹟踏査記『仏教学セミナー』26

柳東植 土着信仰と宗教受容—韓国と日本における仏教受容形態の比較—伽藍構造と仏画を中心に—『朝鮮学報』83

大西修也 百済仏立像と一光三尊形式—佳塔里慶寺址出土金銅仏立像をめぐって『MUSEUM』315

蔡印幻 『新羅仏教戒律思想研究』国書刊行会

江田俊雄 『朝鮮仏教史の研究』国書刊行会(江田論文集)

1978

田村圓澄 飛鳥仏教と朝鮮『日本のなかの朝鮮文化』40

橋本芳契 韓国山岳崇拝の仏教的発展—仏国寺石窟庵と維摩経『日本海文化』(金沢大・法文)5

秦弘燮 三国時代—蓮華紋形式に関する比較論 朝鮮考古学年報3
1978年1月

田村圓澄・黄寿永編『百済文化と飛鳥文化』(吉川弘文館)以下所収論文

北野耕平 百済時代寺院址の分布と立地『百済文化と飛鳥文化』

洪思俊 [泊勝美訳] 百済弥勒寺考『百済文化と飛鳥文化』

黄寿永 百済帝釈寺考『百済文化と飛鳥文化』

田村圓澄 百済仏教史序説『百済文化と飛鳥文化』

毛利久 三国彫刻と飛鳥彫刻『百済文化と飛鳥文化』

田村圓澄・黄寿永編 百済仏教年表『百済文化と飛鳥文化』

姜在彦 円仁入唐と新羅坊—民衆間交流の一原型として
『季刊三千里』14

山本智教 韓国古美術巡礼『密教文化』124

渡辺顕正 『新羅・憬興師述文贊の研究』田文昌堂

黄壽永 『韓国仏像の研究』同朋舎

源弘之 『韓国浄土教研究序説』尚文堂

井上秀雄 『古代朝鮮史序説—王者と宗教』寧楽社

1979

洪淳昶 韓国における仏教儀礼の受容について—燃燈行事を中心として『研究報告』〈東北大・日本文化研〉15

中井真孝 仏教の伝来と朝鮮三国『東洋学術研究』18-2

金東賢 慶州皇龍寺址—新羅最大の寺—発掘報告『韓国文化』1-1

黄壽永 新羅白紙墨書華嚴経について『仏教芸術』127

斎藤孝 統一新羅石仏の技法—慶州掘仏寺址四面石仏を中心に
『史迹と美術』49-2

田村圓澄 新羅送使考『朝鮮学報』90 1979年1月

水尾現誠 元暁の勝鬘経解釈について『宗教研究』238

- 金昌爽 元暁の法華宗要について『印仏研』27-2
 金昌爽 元暁の教判観『仏教学年報』13
 李平来 大乘起信論研究(1)―新羅元暁の大乘起信論疏を中心として
 ー『印仏研』28-1
 河合隼雄 明恵上人の夢について『大谷学報』59-3
 李鐘益 韓国仏教に於ける念仏と禪伊藤真城・田中順照両教授頌徳
 記念『仏教学論文集』
 康東均 元暁の浄土思想に於ける声聞観『印仏研』28-1
 奥村周司 高麗における八關会的秩序と国際環境『朝鮮史研究会論文
 集』16
 源弘之 朝鮮浄土教の叡山浄土教に及ぼせる影響佐藤哲英著『叡山
 浄土教の研究』百華苑
 久野健 『古代朝鮮仏と飛鳥仏』東出版
 秦弘燮 『韓国の仏像』学生社
 横超慧日・村松法文編著『新羅元暁撰二障義』平楽寺書店
- 1980
- 鎌田茂雄 新羅の仏教思想『韓国文化』2-12
 鎌田茂雄 東アジア仏教圏の成立江上波夫川崎庸之西嶋定生編『八
 世紀の日本と東アジア 3 (長安から平城へ)』(平凡社)
 鎌田茂雄 朝鮮三国の仏教 井上光貞ほか編『東アジア世界における日
 本古代史講座 4 (朝鮮三国と倭国)』(学生社)
 鎌田茂雄 『朝鮮仏教の寺と歴史』大法輪閣
 木村宣彰 曇始と高句麗仏教『仏教学セミナー』31
 渡辺顕正 憬興師と唐仏教の交渉『印仏研』29-1
 梁銀容 『高麗史』所引の道説識記について『印仏研』29-1
 落合俊典 『遊心安楽道』日本撰述説をめぐって『仏教学論叢』24
 遊心安楽道の著者『華頂短大研究紀要』25
 木村宣彰 菩薩戒本持犯要記について『印仏研』28-2
 金昌爽 元暁の教判資料に現れた吉蔵との関係について『印仏研』
 28-2

- 李平来 元暁の真如観―起信論海東疏を中心として―『印仏研』29-1
 李平来 大乘起信論研究(二)―新羅元暁の大乘起信論疏を中心として
 ー『仏教学研究年報』14(駒沢大学大学院)
 李箕永 聖僧・元暁の思想『韓国文化』2-3
 李箕永 円光の思想的寄与『韓国文化』2-5
 李箕永 元暁の弥勒信仰『韓国文化』2-12
 李楠永 孤雲・崔致遠の思想『韓国文化』2-1
 坂詰秀一 日韓古代寺院の伽藍配置『韓国文化』2-1
 康東均 元暁伝『仏教文化』29-1
 文明大 高句麗初期の仏像様式『韓国文化』2-3
 文明大 無為寺の「西方極楽」壁画『韓国文化』2-4
 田村円澄 『古代朝鮮仏教と日本仏教』吉川弘文館
- 1981
- 岡本敏行 渡来氏族と仏教―百濟王氏とその氏寺『龍谷史壇』79
 斎藤忠 高句麗・百濟の仏教文化に関する二・三の考察『日本仏教
 史学』16
 斎藤忠 新羅の葬制から見た甘山寺跡石造阿弥陀如来像・弥勒菩薩像
 銘文の一解釈『朝鮮学報』99・100
 山本智教 仏教美術史の流れ『密教文化』134
 鎌田茂雄 十門和諍論の思想史的意義『仏教学』11 (仏教学研究会)
 康東均 元暁の浄土思想に於ける生因説『印仏研』29-2
 木村清孝 元暁の闡提仏性論『仏教の歴史的展開に見る諸形態』
 吉津宣英 書評：横超慧日・村松法文著『新羅元暁撰二障義』『仏教
 学セミナー』34
 吉田靖雄 行基における三階教および元暁との関係の考察『歴史研究』
 19大阪教育大学歴史学研究室
 洪潤植 韓国の舍利信仰とその文化『韓国文化』3-9
 鄭永鎬 韓国の石造浮屠(上)―新羅時代の浮屠『韓国文化』3-1
 田村円澄 二つの半跏像『韓国文化』3-3
 鄭永鎬 韓国の石造浮屠(下)―新羅時代の浮屠『韓国文化』3-2

- 李箕永 元暁の実相般若観 『韓国文化』3-6
 金雲学 花郎道の思想 『韓国文化』3-6
 鎌田茂雄 東アジアの仏教儀礼 元興寺文化財研究所編『東アジアにおける民俗と宗教』吉川弘文館
 任東権 韓国における民間宗教と仏教 元興寺文化財研究所編『東アジアにおける民俗と宗教』
 田村円澄・秦弘燮編『新羅と日本古代文化』吉川弘文館
- 1982
- 久野健 百済仏の服制とその源流(上)―百済仏と飛鳥・白鳳仏 『韓国文化』4-12
 大西修也 高句麗古墳壁画にみる雲文の系譜(上) 『仏教芸術』143
 康東均 新羅郷歌における浄土思想 『印仏研』30-2
 浜田耕策 新羅の寺院成典と皇龍寺の歴史 『研究年報』28
 (学習院大・文)
 浜田耕策 新羅の神官と百座講座と宗廟 『日本古代史講座』9
 李平来 『涅槃宗要』の如来蔵説 『印仏研』30-2
 田村円澄 古代朝鮮の弥勒信仰 『朝鮮学報』102
 李成市 朝鮮における外来思想とその受容者層 『朝鮮史研究会論文集』19
 稲垣晋也 飛鳥・白鳳時代の造寺活動と百済・新羅の影響 『韓国文化』4-1
 鎌田茂雄 朝鮮仏教の特質 『朝鮮史研究会論文集』19
 愛宕頭昌 『韓国仏教史』山喜房仏書林
 田村円澄 『日本仏教史1―飛鳥時代』法蔵館
- 1983
- 洪潤植 中国南北朝と百済の仏教 『仏教史研究』(龍谷大)18
 李成市 新羅中代の国家と仏教 『東洋史研究』42-3
 亀田修一 百済寺院跡の伽藍と立地 『韓国文化』5-10
 大西修也 百済仏再考―新発見の百済石仏と偏衫を着用した服制をめぐって 『仏教芸術』149

- 久野健 百済仏の服制とその源流(下)―百済仏と飛鳥・白鳳仏 『韓国文化』5-1
 田村晃一 高句麗の寺院址に関する若干の考察 『佐久間重男教授退休記念 中国史・陶磁史論集』燎原出版
 金正基 新羅建築の特徴―主として寺院址を中心に 『九州歴史資料館 開館十周年記念太宰府古文化論叢 下』吉川弘文館
 吉岡完祐 中国郊祀の周辺国家への伝播―郊祀の発生から香春新羅神の渡来まで 『朝鮮学報』108
 石井公成 元暁と中国思想 『印仏研』31-2
 永吉博人 元暁『二障義』の研究―『起信論』註疏との関係を中心として 『竜谷大学大学院紀要―文学研究科』5
 千明東道 金剛三昧経論の一考察―五義説を中心として 『印仏研』31-2
 任万植 法華宗要における一乗説について 『印仏研』31-2
 吉村怜 止利式仏像の源流 『中国仏教図像の研究』東方書店
 毛利久 日韓古代美術雑考・白鳳の仏教美術 『韓国文化』5-2
 毛利久 『仏教東漸―朝鮮と日本の古代彫刻―』法蔵館
 田村円澄 『日本仏教史4―百済・新羅』法蔵館
 田村円澄 『日本仏教史2―奈良・平安時代』法蔵館
 田村円澄 『半跏像の道』学生社
 鎌田茂雄 朝鮮仏教史玉城康四郎編 『仏教史Ⅱ』山川出版社
 斎藤忠 『古代朝鮮・日本金石文資料集成』吉川弘文館
- 1984
- 大西修也 対馬と渡来仏―新発見の百済半跏像 『韓国文化』6-10
 千恵鳳 現存する世界最古の木版本―新羅時代刊行の無垢浄光大陀羅尼経を中心に 『韓国文化』6-8
 八尋和泉 対馬黒瀬の新羅金銅仏 『美術史』116
 韓泰植 新羅・恵宿の弥勒信仰について 『印仏研』33-1
 岩佐貢三 風水思想と風水師家(一)韓国篇 『中央学術研究所紀要』13
 洪潤植 東大寺の「お水取り」をめぐって―韓国燃灯会とのかかわり

を中心に『韓国文化』6-6

斎藤円真 赤山明神に関する一考察『天台学報』26

1985

章輝玉 『遊心安楽道』考『南都仏教』54

大西修也 百済半跏像の系譜について『仏教芸術』158

徐補鐵 法華宗要の研究『印仏研』33-2

渡辺顕正 憬興師の無量寿経第十八願観『印仏研』34-1

比良祐之 新羅元暁の浄土教『竜谷大学大学院紀要』6

速水侑 百済仏教と飛鳥仏教—仏教公伝と法興寺建立を中心に—
『韓国文化』7-10

堀池春雄 新羅仏教とわが天平仏教『韓国文化』7-10

田村円澄・黄壽永編『半跏思惟像の研究』吉川弘文館所収論文

田村円澄 半跏思惟像の諸問題 同研究

黄壽永 百済の半跏思惟像同研究

岩崎和子 広隆寺宝冠弥勒に関する二三の考察同研究

大西修也 対馬浄林寺の銅造半跏像について 同研究

田辺三郎助 飛鳥仏と南北朝の仏像『歴史公論』116

田村円澄 『古代朝鮮と日本仏教』講談社

金三龍 『韓国弥勒信仰の研究』教育出版センター

1986

洪淳和 羅末麗初の変動期における政治と宗教(上)—特に後三国時代を中心として『研究報告』(東北大学・日本文化研)22

宋錫範 百済の石塔『韓国文化』8-4

宋錫範 新羅の石塔『韓国文化』8-6

木村誠 統一新羅の骨品制—新羅華嚴経写経跋文の研究『人文学報』185(東京都立大)

武田幸男 創寺縁起からみた新羅人の国際観中村治兵衛先生古稀記念
『東洋史論叢』刀水書房

高橋正隆 本朝目録史考-紫微中台遺品『判比量論』の研究-『大谷大学研究年報』38

大西修也 阿彌陀・弥勒信仰の実態と図像『論叢仏教美術史』町田
甲一先生古希記念会

小泉顕夫 『朝鮮古代遺跡の遍歴』六興出版 1986

田村円澄 『仏教伝来と古代日本』講談社

速水侑 『日本仏教史—古代』吉川弘文館

1987

金東賢 三国遺事と皇竜寺址『アジア公論』16-4

秦弘燮 三国遺事にみる塔像 同16-4

崔柄憲 三国遺事に見える韓国古代仏教史の認識同16-4

金相鉉 三国遺事の書誌学的考察『アジア公論』16-3

安承周 百済寺址の研究 アジア公論16-3

田村円澄 古代の韓国仏教と日本の仏教 『韓国文化』9-1

黄壽永 新羅の梵鐘と万波息笛説話 『中吉先生喜寿記念論集 朝鮮
の古文化論叢』国書刊行会

黄壽永 新羅の梵鐘と萬波息笛の説話『韓』105
(原文は韓国・『新羅文化』1 1984年12月)

正木晃 新羅密教研究『史境』14

鄭永鎬 新羅美術研究における諸問題『韓』105

洪淳和 羅末麗初の変動期における政治と宗教(下)
『研究報告』(東北大学日本文化研)23

申栄勲・黄義秀 韓国の仏教寺院建築『コリアナ』1987秋

朱南哲 歴代の寺刹建築『コリアナ』1987春

町田甲一 南北朝仏像様式史論批判—冕服式衣相の仏像の起源と四川省
成都出土の仏像について『國華』1102

平井俊英 元暁の法華宗要『法華玄論の註釈的研究』春秋社

田村円澄 古代朝鮮仏教と日本仏教『日本古代の宗教と思想』
山喜房仏書林

吉村怜 飛鳥様式南朝起源論『アジアと日本—考古・美術篇』田
村円澄先生古希記念会編

鎌田茂雄 『朝鮮仏教史』東京大学出版会

1988

- 北野耕平 百濟・弥勒寺の発掘調査『仏教芸術』179
 福土慈稔 朝鮮半島に於ける法華経伝播について『大崎学報』145
 石井公成 『釈摩訶衍論』の成立事情 『中国の仏教と文化』

鎌田茂雄博士還暦記念論集刊行会

- 鎌田茂雄『新羅仏教史序説』東京大東洋文化研究所
 森浩一監修『韓国の古代遺跡1—新羅編(慶州)』中央公論社

1989

- 鎌田茂雄 古代韓・日・中の仏教交流—7・8世紀を中心として『韓国文化』11-8
 藪田香融 東アジアにおける仏教の伝来と受容—日本仏教の伝来とその史的的前提『紀要』(関西大・東西学術研)22
 南天祐 新羅石窟庵の構造と仏教『東アジアの古代文化』59
 正木晃 日韓の仏教受容とその展開—密教を中心として井上辰雄編『古代史研究の課題と方法』(国書刊行会)
 吉村怜 百濟仏教伝来考『社会科学討究』(早稲田大)35-2
 渡辺顕正 新羅浄土教家の大経「胎化段」観『印仏研』38-1
 梯信暁 新羅義寂『無量寿経述義記』の一考察—世親『浄土論』の位置付けについて『印仏研』38-1
 法頂 寺院建物の仏教的意味と用途 『季刊コリアナ』2-1
 福土慈稔 円光の世俗の五戒と花郎集団について 『印仏研』37-2
 森浩一監修『韓国の古代遺跡2—百濟・伽耶編』中央公論社

1990

- 井上秀雄 日本と朝鮮の仏教伝来『東洋学術研究』29-4
 木本清史 元暁の涅槃経解釈について『印仏研』38-2
 福土慈稔 新羅仏教伝来考『仏教学論集』(立正大・院)19
 福土慈稔 元暁著述に於ける天台の影響について『印仏研』39-1
 福土慈稔 元暁法華経観—元暁註疏に於ける天台の影響の有無—身延山短期大学『棲神』62
 金元龍 三国時代の仏像について『東洋学術研究』29-4

- 中島志郎 新羅円光「世俗五戒」の思想的背景『禅研紀要』16
 韓泰植 新羅における萬日念仏結社の成立と展開『印仏研』39-1
 金沢弘 「華嚴宗祖繪伝」の成立と画風『華嚴宗祖師繪伝・華嚴縁起』中央公論社
 竹内順一 「華嚴宗祖師繪伝」詞書の書風について『華嚴宗祖師繪伝・華嚴縁起』中央公論社

1991

- 盧官坪 三国時代(朝鮮半島)の仏教受容—末法思想と関連して『天台学報』33
 坂上早魚 日本・唐・新羅における授戒制度について『史論』(東京女子大)44
 福土慈稔 元暁の法華経観に於ける諸問題『天台思想と東アジア文化の研究』山喜房仏書林
 福土慈稔 新羅仏教研究と「花郎世紀」『東方』7東方学院
 梯信暁 元暁の仏土論について『印仏研』40-1
 藤能成 元暁における信の問題『印仏研』40-1
 中島志郎 円光「世俗五戒」と「孝」思想 『印仏研』40-1
 上原和 朝鮮・中国の遺物から見た法隆寺金堂建築の様式年代—初唐様式の受容と和様化された飛鳥様式との混淆(上)(中)(下)『仏教芸術』194196 197
 鎌田茂雄編集『講座仏教の受容と変容5—韓国編』佼成出版
 韓普光『新羅浄土思想の研究』東方出版

1992

- 谷豊信 仏教伝来と蓮華紋瓦当『アジアからみた古代日本(新版古代の日本2)』角川書店
 吉村怜 日本早期仏教像における梁・百濟様式の影響『仏教芸術』201
 川上洋 渤海の東京と二仏座像『仏教史学研究』25-2
 久野健 平壤博物館の仏像『MUSEUM』490 東京国立博物館
 福土慈稔 「花郎世紀」にみられる新羅仏教事情『印仏研』40-2
 福土慈稔 『日本霊異記』にみられる朝鮮半島観『東方』8

1993

- 福士慈稔 新羅の仏教公認と受容形態に関する一考察 『印仏研』41-2
 福士慈稔 新羅に於ける仏教受容の諸問題—王族の出家を中心として
 『調査研究報告』〈学習院大・東洋文化研〉39
 福士慈稔 新羅花郎研究序説『大崎学報』149
 千田剛道 高句麗寺院跡の発掘『仏教芸術』207
 深津行徳 法体の王—序説：新羅の法興王の場合 調査研究報告〈学習
 院大・東洋文化研〉39
 梯信暁 新羅浄土教の特徴に関する一考察『仏教学研究』(龍谷)49
 鄭禮京 韓国半跏像思惟像の編年に関する一考察(四)—身体表現と
 台座との関係を通して見た—『仏教芸術』206
 金東賢 皇竜寺跡の発掘『仏教芸術』207
 大西修也 韓国半跏像の成立と尊格について—編年に関する鄭禮京論文
 批判—『仏教芸術』208
 張慶浩 近年の韓国古代寺院跡の発掘『仏教芸術』207
 張慶浩 弥勒寺跡の発掘『仏教芸術』207
 申光燮・洪性彬 扶蘇山廢寺跡の発掘『仏教芸術』207
 崔孟植・尹根一 王宮里廢寺(官宮寺)の発掘『仏教芸術』207
 姜友邦 韓国古代の舍利供養塔・寺鎮具・鎮壇具『仏教芸術』209

1994

- 上川通夫 律令国家形成期の仏教『仏教史学研究』37-2
 直林不退 渡来系氏族仏教の一考察『印仏研』43-1
 上原和 高句麗絵画の日本へ及ぼした影響—蓮華文表現から見た古代
 中・朝・日関係『仏教芸術』215
 韓泰植(普光) 新羅・元暁の弥陀證性偈について『印仏研』43-1
 梯信暁 新羅浄土教の展開(1)—十念論に着眼して『印仏研』42-2
 佐藤繁樹 元暁の『金剛三昧経論』に於ける論理構造の特色—無二而不
 守—思想『印仏研』42-2
 福士慈稔 新羅円光法師伝再考—円光の生没年代について—
 『印仏研』42-2

- 福士慈稔 『花郎世紀』における諸問題『印仏研』43-1
 愛宕邦康 大覚国師義天と『遊心安楽道』『印仏研』43-1
 中井真孝 『朝鮮と日本の古代仏教』東方出版
 李成市 法隆寺金堂阿弥陀如来坐像台座から発見された人物画像の出
 自をめぐる『アジアにおける国際交流と地域文化』
 田村円澄 『飛鳥・白鳳仏教史—(上)(下)』吉川弘文館
 1995
 浜田耕策 留唐学僧戒融の日本帰国をめぐる渤海と新羅佐伯有清先生
 古稀記念会編『日本古代の伝承と東アジア』(吉川弘文館)
 福士慈稔 聖徳太子と朝鮮三国『東方』11『東方』東方研究会
 藤能成 元暁『両卷無量寿経宗要』における誓願と菩提心について
 『日本佛教学会年報』60
 朴亨国 韓国・統一新羅時代における石造如来像の流れについて—新
 羅華嚴宗における本尊の圖像変化を中心に『名古屋大学古
 川総合研究資料館報告』11
 李成市 新羅僧・慈蔵の政治外交上の役割『朝鮮文化研究』2(東京
 大朝鮮文化研究所)
 李乾熙 浮雪居士と瀉瓶『印仏研』87(44-1)
 愛宕邦康 『遊心安楽道』来迎院本の包紙『印仏研』44-1
 姜昌鍋 憬興の仏身観—無量寿経連義述文贊を中心として—
 『印仏研』44-1
 雲井昭善 弥勒信仰にみる韓・日の比較—韓・日文化の相互理解をめぐ
 って—『比較思想研究』22(比較思想学会)
 前田恵学 仏教における寺院の思想『比較思想研究』22(比較思想学会)
 朴亨国 七獅子蓮華座の圖像について—韓国統一新羅後期の石造毘盧
 遮那仏坐像を中心に『密教図像』14
 森浩一監修 『高句麗の歴史と遺跡』中央公論社
 1996
 井上秀雄 文化史からみた仏教公伝の諸様相『仏教史学研究』39-1
 石井公成 仏教受容期の国家と仏教—朝鮮・日本の場合 高崎直道・木

- 村清孝編『東アジア社会と仏教文化（シリーズ東アジア仏教5）』（春秋社）
- 金理那・新藤武弘 早期仏教彫刻史における三国・統一新羅の日本への影響『年報』（鹿島美術財団）13（別冊）
- 金竜煥 新羅の仏教精神とその美学『綜合佛教研所所報』18（大正大・）
- 柴崎照和 明恵と新羅・高麗仏教『印仏研』45-1
- 林泉 高句麗における仏教受容と平壤—肖門・伊弗蘭寺の位置をめぐって『駿台史学』96
- 吉村怜 仏教美術の東アジアへの伝播高崎直道木村清孝編『東アジア社会と仏教文化（シリーズ東アジア仏教5）』春秋社
- 崔昌述(玄覺) 元暁の修行観—「三国遺事」の考察を通じて『印仏研』45-1
- 遠藤純一郎 『釈摩訶衍論』新羅成立説に関する考察『智山学报』45（大正大・真言学智山研究所）
- 朴亨国 韓国・統一新羅時代後期の石造毘盧遮那仏坐像について—洛東江中・上流地域（慶尚北道地方）を中心に『美術史』139
- 徐徳仙 円測の『解深密経疏』における八識説について『印仏研』44-2
- 徐徳仙 円測著『解深密経疏』における八識の研究『宗教研究』307
- 張愛順 普覚国尊一然の仏教観『印仏研』45-1
- 韓泰植 韓半島で作られた疑偽経について『印仏研』45-1
- 愛宕邦康 『華嚴宗祖師絵伝』元暁絵の制作意図に関する一試論『印仏研』45-1
- 1997
- 朴光輝 渤海の仏教遺跡『仏教史学研究』40-1
- 朴亨国 統一新羅時代の降魔触地印像の流れについて『美学美術史研究論集』15
- 朴亨国 エローラ石窟庵第十一・十二窟について—仏三尊形式の図像学的考察および金剛界大日如来像の紹介『仏教芸術』233

- 朴亨国 金剛界大日如来と七獅子蓮華座 『日本の美術』374
- 福土慈稔 新羅王権と華嚴思想『華嚴学論集』
- 藤能成 元暁の浄土思想と信仰『印仏研』45-2
- 朴亨国 慶北大学博物館所蔵砂岩造毘盧遮那仏坐像について『仏教芸術』230
- 1998
- 金誠龜 発掘された百済の寺院跡と出土遺物 森浩一・上田正昭編『継体大王と渡来人』大巧社
- 堀敏一 唐代新羅人居留地と日本僧円仁入唐の由来 古代文化50-9
1998年9月 pp. 47~53
- 李妍淑 新羅初期雑密思想攷『朝鮮学报』166
- 藤能成 元暁と五姓各別説『印仏研』47-1
- 朴亨国 慶州石窟庵の龕内像郡に関する一試論—維摩・文殊と八大菩薩の復原を中心に『仏教芸術』239

本稿では本企画に反し日本国内で英語で発表された論文と韓国国内で日本人が発表された論文は紹介していない。それは筆者が韓国在住のため企画会議に一度しか出席できなかったことによるものであるが、今後責任を持って、美術関係の論文の補完と共にそれ等の論文を紹介することを記しお詫びするものである。

フクシ ジニン
(韓国培材大学助教授)

韓国仏教学 SEMINAR 第八号(改訂版)

西暦 二〇〇〇年 七月 十五日 印刷

西暦 二〇〇〇年 七月 二〇日 初版 発行

西暦 二〇〇〇年 八月 三〇日 改訂版 発行

編集一黙(朴点淑)・圓忠(金鍾旭)・金天鶴

発行 韓国留学生印度学仏教学研究会

印刷 図書出版 藏経閣

〒 678 - 895

慶尚南道陝川郡伽倻面緝仁里10番地
電話 〇五五 - 九三二 - 七三〇〇

発行所 山喜房仏書林

〒 113 - 0033

東京都文京区本郷五 - 二八 - 五

振替 東京 〇 - 一九〇〇番

電話 〇三 - 三八一 - 一五三六一

この改訂版は、初版の誤字や編集上の誤りを訂正したものである。
頁や内容は初版と原則的に同じであるが
初版の247頁、里道德雄[1981a]の整理が間違っているので
訂正した。